3.学生レポート

Ⅰ 熊本大学医学部医学科生

熊本大学医学部１年　　佐藤　実紗

今回の実習目標は、医学生として礼節と相手を尊重する態度で地域住民と交流し、熊本地震が人々の活動にどのような影響を与えているのかを理解し、最終的にどのような医師像が熊本県において求められているか考えることであった。自己目標として、地震の被害が一番甚大であった地域を見て、人と触れることで今回の震災がどんな影響を与えたかを知り、学生の自分が出向くことで少しでも元気を与えるというのを意識した。

３日間の実習でできたことは、２日目に訪れた南阿蘇中学校で中学生とたくさん話せたことである。勉強のことだけではなくて、自分の進路について相談してくれる生徒さんもいて、たくさんのことを話すことができた。少しでも参考になればと思う。そしてできなかったことは、初日に行った益城のテクノ団地での聞き取り調査で、より多くの情報を引き出せるような質問のアプローチができなかったことである。仮設住宅に住まわれている方はやはり日々の生活に大変なご様子で、最初はこちらがした質問だけに答えるだけという方がほとんどだった。しかし同じグループの先輩は、相手の方が困っていることなどを気軽に話せるような雰囲気になるように話題を変えたり笑顔で話したりしていた。

今回の実習で、熊本地震で被災した人は、生活は変わってしまったけれど前向きに生きようと努力されていること、また患者さんと信頼関係を築くことができる医師には、患者が本当に思っていることを言いやすいような人柄が求められるんだなと感じた。今後自分は医学を学ぶということだけに固執せず、患者に近い考えを持つ医師になれるよう努力していきたい。

熊本大学医学部1年　　白奥　光一

１）当初の実習目標

・益城町のテクノ団地での現状および現在必要とされているものについて聞き取りを行い、今後何をする必要があるか考察する

・南阿蘇中学校の生徒達に勉強を教え生徒達とふれ合い、地震についてどのように感じているのか調査する

・実習に参加する様々な人達と意見交換を行い、お互いに議論することで自らの意見を高める

２）この実習で、できたこと、できなかったこと

・できたこと

・益城町のテクノ団地の聞き込みにより被災者が現在どのようなものを必要としているか知ることができた

・南阿蘇中学校の生徒達から話を聞くだけでなく、教師の方からも生徒達の様子の変化などの話を聞くことができた

・様々な人達の意見を聞いて、自分では気づかなかった問題点や改善点を知ることができた

・できなかったこと

・被災者が挙げた問題点を解決するために様々な意見を考えたり、聞いたりしたが、それを実行するためには様々な課題が存在し、具体的な案を考えることができなかった

・南阿蘇中学校の生徒達から話を聞くことができたが、学校の様子だけでは生徒達が本当に感じていることを聞くことができなかった

・プレゼンの発表を行ったが、それを実行するための課題は多く、現実的に実現できるような案をあまり出すことができなかった

３）この実習の全体的な感想

益城町の聞き取り調査では、テレビなどを見ているだけでは分からなかった現地の人の声を聞くことができた。特に、現地の人が叫ばれていたこととしては、自宅の解体作業の費用および日程や支援金などの給付についての情報でした。今回訪れたテクノ団地では2年という期限があるので、もう1度元の場所に住みたいと考えていても2年後に住めるか分からないのは大きな問題だと思った。また、地震の影響で職をなくした方が多くいらっしゃるので、金銭面のサポートについても早急な対策が必要だと思った。しかし、役場の方々も現在大忙しで働いていることを忘れてはいけないと思う。役場の方々だけに負担を掛けるのではなく、様々な人々が協力して復興を行う必要があると実感した。

次に、南阿蘇中学校の生徒達については、学校内では特に地震のことについてストレスを感じているようには見えなかった。しかし、教師の方々に話を聞くと、自宅では地震前に比べて元気がなくなった様子が見られる生徒もいるようです。なので、学校の様子ばかりに気を配るのではなく、自宅の様子なども気をつける必要があると思った。最後に、プレゼンの発表を通して、他のグループの意見を聞くことができ、自分では考えていなかった問題点の解決策などを聞くことができた。特に、今回感じたことを医療の場面でどう生かせるのかあまり考えていなかったので、どんな場面で生かせるのか考えていきたいです。

４）これらをもとに、今後の学習計画、目標

今回の経験をどう医療に生かすか考えていきたい。1年生として今回参加したが、医療に関して分かっていないことが多いので、これから医療を学ぶ上でどんな場面で今回の経験が生かせるか考えていきたい。また、今回の経験を自分の中で留めておくのではなく、同学年の人達にも自分の経験を伝え、今回の経験が多くの人に役立って欲しいです。

熊本大学医学部1年　　高橋　啓太

1）当初の実習目標

･地震時の現場の医師の対応について学ぶ

･被災者に対してのコミュニケーション方法について学ぶ

･実習に参加される方々と親交を深める

2）この実習でできたこと、できなかったこと

被災者に対してのコミュニケーション方法については益城のテクノ仮設団地における聞き取り調査を実際に体験したことで少しは学べたと思う。

地震時に活躍された先生方とは一対一であまり会話ができなかったが、熊本大学の先輩方や自治医大の同学年の方々とは親交を深めることができた。

3）この実習の全体的な感想

今回の実習は地震と関連した、普通の医学生は体験できないような内容だった。テクノ団地の聞き取り調査では今まで報道番組等を通してしか見聞きしたことがなかった仮設住宅をこの目で見た。仮設住宅に入居されている方々の設備等に対する意見は様々で、個人個人のニーズに応えるのは災害時においては難題であるというのが被災者の生の声を聞くことで実感できた。

南阿蘇中の生徒さんとの交流は、年齢も近いとあってスムーズにコミュニケーションをとれた。

宿泊施設や食事に関しては大大大満足の内容だった。特に露天風呂は最高だった。

4）今後の学習計画、目標

誰に対してもスムーズなコミュニケーションがとれるよう、自分から積極的にボランティア等に参加しようと思った。また、根本的に医療的な知識が不足しているので日頃の授業を怠らず頑張っていこうと改めて思った。

熊本大学医学部1年　　武元　勇人

１）当初の実習目的

今回の夏季医療特別実習に臨むにあたり私は当初、

1,被災地の現状を知る

2,自分から行動を起こす

3,実習を通して得たものを今後にどう生かすかを考える

という３つを目標として実習に取り組んだ。

２）この実習で、できたこと、できなかったこと

今回の実習を通して、目標として掲げていた３つのうち被災地の現状を知ることと、実習を通して得たものを今後にどう生かすかを考えるという２つのことがよくできた。逆に今回の実習ではあまり自分から行動を起こせずにいたので次回はしっかりと取り組めるようにしたい。

３）この実習の全体的な感想

地震発生直後はよくニュースなどで阿蘇・益城近辺は取り上げられていたが、最近ではほとんど報道されていないが、実際は復興までのめどがはっきり立っておらず、現地の人たちが非常に困っている状態が続いていることを知ることができた。また、２年後には退去しなければならない仮設住宅に住んでいる人たちの要望を聞くうえで、本当に必要なものやそうでないもの、必要性はあるが現実的でないものなどさまざまなものを区別し、必要性はあるが現実的でないものの代替案などについて自分で考えてみることができた。今回初めての夏季医療特別実習であったが、非常に得るものの多い実習となった。

４）これらをもとに、今後の学習計画、目標

地域医療に携わるうえで、積極的に行動に移すことは非常に重要なことであるため、進んで自分から取り組む習慣を身につけたい。また、今回の実習から、物事をいろんな角度から見つめることを学んだので、そのためには医療分野だけでなく幅広い知識を身につけることが必要と感じたため、それらの習得に向けても精進していきたい。

熊本大学医学部１年　　鶴田　恵里

1)当初の実習目標

・熊本地震が益城や阿蘇にどのような被害を与えたのか、医療においてはもちろん、それ以外の被害も学ぶこと。

・市内よりも被害が大きかったところで被災された方の現状を知ること。

・PFAに気をつけて医学生として実習に参加すること。

2）この実習でできたこと、できなかったこと

«できたこと»

実際に地震が発生してから現場で対応された先生方の講演を聞いて、DMATなどの医療団体のことであったり、どのようなことをされていたのかを知ることができた。

テクノ団地で生活している方々に質問以外のことも話すことができた。

子供たちに自分の方から話しかけ、勉強を教えることができた。勉強以外にも休み時間などで学校での話や部活のことなど交流をすることができた。

«できなかったこと»

テクノ団地では質問の内容を頭の中に入れ、話の中に入れて質問をするということができなかった。

最初の方はなかなか子供たちと積極的にレクリエーションなどをすることができなかった。これからの進路などについて、相談に乗ったりアドバイスしたりできなかった。

3）この実習の全体的な感想

先生方の講演を聞いて自分がニュースなどを通じてしか知らなかったことを詳しく学ぶことができました。

熊本県災害医療提供体制の全体像を見るとたくさんのチームがあり、いかにチームの連携が大事なのかということがわかります。また、全国から支援にきた医療チームの数がとても多いことに驚きました。阿蘇医療センターは免震機構だったので建物自体の被害も少なかったし、阿蘇広域防災訓練を事前に行っていたということで、日頃からの対策の重要さを改めて感じました。

テクノ団地では、仮設団地に行って入居者の方々に話しを聞くという経験はなかなかできないし、する機会もなかったので戸惑う点が多かったです。同じ団地に入っている方でも全く違う意見を持っていらっしゃいました。1時間話した女性の方は、地震前まで住んでいた家はきちんと耐震工事をしていたが、全壊だったということで、とても明るい方だったのですがやはりそのような話になるとやりきれない表情をされ、そのとき自分はどうすればいいのかと迷いました。でも、仮設に入ってあまり人と話していなかったということで、私たちと話すことができて喜んでいらっしゃったので、とてもうれしかったです。

中学生との勉強会では、子供たちの元気さに驚かされました。阿蘇の被害の大きさはテレビや新聞などを通じて知っていたので不安なところもあったのですが逆に自分たちが元気をもらいました。しかし、中学生の子たちと地震の話をすることはなく、学校の先生によると、1対1でないと話してくれないそうで、やはり思春期の中学生ならではのことだと思いました。

4）これらをもとに、今後の学習計画、目標

中学校の先生が、生徒たちはこれまで緊張の糸を張っていたがそれが切れたときが心配だということをおっしゃっていたのでこれからもケアが重要だと思いました。また生徒に限らず他人と同じ目線で接することが大事だと学んだのでこれから気をつけていきたいです。

テクノ団地で聞き取り調査をし、専門的なことができなくても話すということの大切さを学んだので、これからの学生生活ではいろんな人との交流の輪を広げていきたいです。

熊本大学医学部1年　　持田　香織

私がこの実習に参加するにあたって初日に立てた目標は次の３つである。１つ目は、地域住民の方々との交流の仕方を学ぶこと。２つ目は、人との対話・会話・コミュニケーション能力の向上。３つ目は、地域に求められる医師像についての理解を深めること。これらの目標を達成できるように実習に取り組んだ。

初日のテクノ団地の聞き取り調査のときには、２人の方に直接お話を伺った。会話をしながら情報を聞き出すことが難しく、特に最初の方の時はただ質問をして答えてもらうみたいな形になってしまった。２人目の方の時は、少し会話ができていたように思う。相づちをうつなど、相手の立場にたって共感しながらお話を伺う事が大切だと感じた。

南阿蘇中学校では、中学生は自分から手を挙げて質問してくる子はなかなかおらず、こちらから大丈夫か聞くと質問してくる子がほとんどであった。全体を見ながらも個人個人の様子に気づく事ができるような視野の広さが求められていたように感じた。短い時間ではあったが、よく話をすると問題の質問以外にも勉強の仕方や進路の事について質問してくれる子もいた。短い時間の中でも、相手の立場にたって話しやすい雰囲気を作る事が大切だと思った。

今回の実習を通して、益城では年配の方と南阿蘇では中学生とお話をする機会があり、相手の年代によってコミュニケーションの方法を変える必要があるという事を実感した。このことは将来の診療にも通ずる事であると思うし、今回この事を実感できる事ができてよかったと思う。

今回の実習で感じたのは、自分にはまだまだコミュニケーション能力が不十分であるということだ。上級生のように自然に会話ができるようになりたいと思ったので、医学や地域医療について学ぶとともに、コミュニケーション能力の向上にも努めていきたいと思う。

熊本大学医学部1年　　吉岡　幸英

１.当初の実習目標

・熊本地震が地域医療に与えた影響を知る

・被災地域の方と適切なコミュニケーションを図る

・自分が医師となり被災地で活動することになった場合どう動くべきかを知る

２.この実習で、できたこと、できなかったこと

１日目のテクノ団地での聞き取り調査では６軒の方に協力いただき、うち２軒で聞き取り、他の２軒でお伺いした内容の書き取り役をこなした。

２日目の南阿蘇中学校では適当なタイミングで問題に行き詰まっている生徒さんに声をかけられた。しかし、生徒さんとの交流の時に同じグループになった生徒さんをうまく乗せられなかった。

３日目の活動報告では諸事情によりスライドの作成に参加できなかったが発表者としてグループに貢献できた。

３.この実習の全体的な感想

熊本大学の先輩方、自治医科大の方、今回の実習を企画・協力していただいた方々と全員ではないが親睦を深めることができた。

熊本地震と向かい合った様々な立場の方々からお話を講演という形でお伺いすることができ、熊本地震の裏でどのような問題が発生し、また、それにどのような対応があったのかを学ぶことができた。特にDMATの活動などに興味を惹かれた。

聞き取り調査では皆さん快く回答してくださったのでコミュニケーションを図りやすかった。しかし、行政などへの意見をきくと「贅沢は言えない」とお答えになり、正直な意見を引き出すということに関して不十分に思えたのでそれを為すコミュニケーション能力を獲得していきたい。

４.これらをもとに、今後の学習計画、目標

医学的知識を身につけていくことはもちろん、それを使いこなすために患者さんの本音を引き出す能力を身につけなければならない。そのために普段の生活の中で自分の生活する地域の行事などの多くの方と関わる機会があれば積極的に参加していきたい。

熊本大学医学部２年　　安倍　悠乃

１)地震について被害の特にひどかった地域を訪ねて当時の状況や現状について聞いて知ること。これからに必要なことを考えること。

２)仮設団地をまわって一人一人から今困っていることやどれだけ被害が大きかったかなど時間をかけて詳しく聞くことができてよかった。

南阿蘇中学校で勉強を教えるのは最初、集中している子の邪魔になるかもと思って積極的に話しかけに行くことができなかったけど話しかけたらいろいろ質問してきてくれる子もいてうまくは教えることができていなかったかもしれないけど交流できてよかった。

３)初日、仮設住宅に訪問に行ったときはほとんどの方の家が全壊でテクノ団地に来られていて益城の被害の大きさを実感しました。日中だったのもあって訪問できたのは年配の方ばかりだったのですが、住めているだけまだ良いとはおっしゃっている方もいたけど交通の不便さ、仮設住宅そのものに不満を持ってらっしゃる方も多かったです。実際に家の中に入れてもらったのですが、狭くて生活する最小限のスペースというような印象でした。地震でただでさえ精神的にダメージを負っているのにストレス多い環境での生活を余儀なくされていて調査の内容が少しでも仮設住宅に暮らしている人に還元されればいいなと思いました。

南阿蘇中学校での実習では、夏休みなのにたくさんの生徒が集まっていて地震の被災地を感じさせない元気さで明るく進められてよかったです。勉強を教えるのは大変だったけどいい経験になりました。

講演会では、地震の際の医療活動について迅速な行動や判断と多くの団体が集まっている中でどう統率をとって効率よく分配していくかが大事だと感じました。

４)今回の実習では被害の大きかった地域を実際に見ることができて、いい経験ができました。これからもニュースなどで現地の状況などを気にかけつつ、災害時医療にも関心を向けながら勉強していきたいと思います。

熊本大学医学部2年　　詹　翔叡

1）実習の自己目標

1.PFAに則った行動を心がける

2.地震による被害の状況を知る

3.積極的にコミュニケーションをとる

2）実習でできたこと・できなかったこと

益城町における聞き取り調査では会話をしながらお話をきくことができたと思う。私たちと話をしたことで仮設住宅の方のストレスを多少軽減してさしあげることができたのではないかと思う。仮設住宅の方のご自宅は全壊や大規模半壊がほとんどであり、南阿蘇中学校の中学生の中には命の危険があった生徒もいるということから本当に甚大な被害があったのだと改めて実感した。益城町で聞き取り調査をさせていただいた方々は高齢者や中年の方が多くてコミュニケーションを取りやすかった。しかし、南阿蘇中学校では自分より年下の中学生が相手であったし、学習時間中は集中している様子だったのでなかなか話しかけづらく苦労した。

3）実習の感想

今回の実習は、地震で一番被害の大きかった益城町と南阿蘇村で行われた。益城町での聞き取り調査を経験して、ひとりひとりの悩みや不安を日常会話の中で聞くことができるコミュニケーション能力が必要だと思った。また、聞き取り調査でいろいろな方が様々な不満や悩みを抱えていらっしゃっていて、将来私が医師になったとき、患者さんのニーズに臨機応変に応えていけるような力も大切だと思った。2日目にあった1日目の振り返りで、今後起こりうる健康問題についてディスカッションしたときに、私は割と直近に起こりうる健康問題にしか目が届かなかったが、先輩や先生は中長期的な問題にまで目を向けていてハッとさせられた。患者さんを治療するうえでも中長期的なところまで目を向けるというのは大事だと思う。南阿蘇中学校で、生徒に問題の解き方について説明しているとき、うまく伝わる人と伝わらない人とがいて少し難しさを感じた。説明の仕方にもう少し工夫が必要だったと思う。これは生徒の質問に答えることに限らず、患者さんに対して病気のことや治療方針について説明するときも同様である。それによって患者さんと信頼関係を築くことや、トラブルを防ぐことにつながると思う。

4）実習で学んだこと・今後の目標

今回の実習で学んだ大切なことをまとめると

1.会話の中で必要な情報を聞き出していくコミュニケーション能力

2.相手のニーズに応えていけるような臨機応変さ

3.直近のことだけでなく中長期的なことにまで目を向けられること

4.相手にしっかりと伝わる説明能力　の4つである。

これを踏まえて今後は

1.コミュニケーション能力の向上（とにかくいろいろな人と話してみる）

2.臨機応変さを身につける（日常で問題に直面したときにいろいろな解決方法を考えてみる）

3.物事を長い目で見ることができるようになる

4.相手に伝わる説明能力を身につける（学校で友達に協力してもらいつつ訓練してみる）　ということを目標にする。

熊本大学医学部2年　　松田　崇秀

[実習の自己目標]

今回地震で大きな被害を受けた益城や南阿蘇への実習ということで、以下の目標を立てた。

１．被災された方々の苦労や現状、お気持ちなどをしっかりと聞く。

２．1より考えられる問題を挙げてその対策について考える
３．震災直後から現在に至るまでの支援する側の動きや大変さを理解する
[この実習で、できたこと、できなかったこと]
1については初日のテクノ団地での聞き取りや2日目の南阿蘇中学での先生との交流でおおむね達成することができた。地域や年齢、家族構成、その他様々な要因から被災されたかたには被災された方の数だけの事情や思いがあり、それは実際に会って話をしないと分からないことも多くあると感じた。つらい思いを涙ながらに語ってくださる方もいて心に響いた。とてもいい経験ができたと思う。
２は問題を挙げるという点については達成することができた。やはり以前よりも生活が不便になっていることは明らかで、そこから発生してくる健康問題が数多く挙げられた。対策についてもいくつか挙げられたが、長期的な視点で見た場合にまた別の問題が発生するなど実現が難しいものが多く、これといった対策が打ち出せなかった。
３については主に講義を聴くことがメインであった。いろいろな職種の方が携わったことやそれらの概要については分かった。しかし講義を聴いただけでそれらを想像するのは難しく、大変さについてはあまり実感がもてなかった。
[この実習の全体的な感想]
今回の実習では被災地に行かせていただくという通常ではできないようなある意味貴重な経験ができたと思う。被災者、支援者という両者のお話を聴くことができ、両者の立場でこの地震について考えることができたというのは非常によかった。できたこと、できなかったことは多くあるが、仮設住宅の方々とお話しできたのが自分にとっては一番の勉強になった。ただ相手の思いや訴えを聴くだけでなくその思いや訴えの裏に何があるかを考えながら聞くと、相手との何気ない会話の中から意外と重要であったりすることを見つけ出すことができるということを学んだ。また聞いていいことと、聞いてはならない・聞かないほうがいいことの境は相手によっても全然違うため見極めが難しかった。これは一朝一夕で身につくものではないと思うが、この新たな課題を今後クリアしていかなければならないと思う。
[今後の学習計画、目標]
やはりまだ知識も乏しければ臨床経験もないために分からないことは多くあった。これからも目の前の勉強しっかりこなしたり、医療系のテレビ番組(ドクターGなど)を観て少しでも臨床の雰囲気を掴めたらと思う。また、様々な年代の方とも積極的にお話をしたりしてコミュニケーションが上手く取れるようにしたり、洞察力を養ったりしていきたいと思う。そして患者さんとの対面で安心感を与え、些細なことから問題に気づく医師になれるよう頑張りたい。

熊本大学医学部2年　　丸目　高大

今回の実習では被災地の方の声を聞くことで被災地の現場を知る、また仮設住宅に住んでいる住民の方に何か出来ることはないか考える、積極的に被災地の方に働きかけるという三つの目標をたてて臨んだ。
この実習でできたことは話の順序を考えながらテクノ団地の方に話を聞くこと、自治医大や実習に参加されていた先生方と積極的に合流すること、中学校の生徒とゲームを通して打ち解けわからないところをきくことだった。次に、できなかったことは聞き取り調査のときに一緒にペアをしていた工学部の方に頼りすぎずに調査を行うこと、夏休みの宿題チェックの休憩時間に生徒に話しかけることだった。
この実習を通して、自分が思っている以上に全壊、大規模半壊している世帯が多く、熊本市内との違いに非常に驚いた。本震の後、一回だけ益城のホテルにボランティアで行ったことがあるが、その時には車中泊の車が駐車場から溢れてホテル沿いの道に列になって並んでいた。私は、益城の揺れがひどくそれを恐れて住民の方が家に帰れないのだろうと思っていたが、テクノ団地に行ったことで本当はこんなにも自分の家を失った方がいるのだと実感させられた。実家のみならず、ご自身が所有されている畑に被害を受けた方もいらっしゃったので、私達はボランティアとして畑の復旧作業を手伝い農家の方が働ける環境を整備したり、例えばラジオ体操などを企画して農作業の代わりに運動の機会をつくってあげたりすることができればいいと感じた。また東日本大震災の際には仮設住宅の団地内での交流が少ないために孤独死も発生してしまったという話を耳にしたので住民の方同士がコミュニケーションをとる機会を増やすことを図ることも必要であると考えた。また、今回訪れた中学校の生徒達は今年の中体連ですべての部活が優勝、準優勝しているという話をきいた。先生方曰く自分達が阿蘇の方に元気を与えなければいけないと生徒達が発言していたという。地震の後、被害をうけて精神的にダメージを受けているのにも関わらず、人を元気づけようとする姿勢を私は人間として尊敬した。
最後に今後の学習目標を考えた。被災地の方とコミュニケーションをとって打ち解けてくると、だんだんその人がかかえている悩みや問題を話してくれるということがわかったので、自分が問診する際安心して病状や患者さんの置かれている環境を話してくれるような医師になるためにこれからコミュニケーション能力を磨いていく必要があると感じた。また、今回はご高齢の方がたくさんいらっしゃったので、通常時に加え災害のとき高齢の方にどんな病気がおこるか、どんなケアが必要なのかを学んでいこうと思った。

熊本大学医学部３年　　奥田　綾乃

１）当初の実習目標

今回の実習では、熊本地震で多大な影響を受けた益城・南阿蘇で直接地域住民の方々から直接お話しを伺い、また医師や保健所、行政の方々からの講演によって医療の視点からも熊本地震を考察する中で、地震が起こった熊本で将来地域医療に将来従事する者として何を生かせるかをしっかりフィードバックしていきたい。また、私は初めて被災地域での災害支援を行うために、事前学習で学んだPFAをきちんと実践
していきたいと思った。

２）この実習でできたこと、できなかったこと

１日目の益城の仮設住宅での聞き取り調査は、被災地の現状・課題は本当に多方面にたくさんに及ぶことを知った。その中で、住民の方々が問題点に関する解決のアイデアを持っていることもあり、実際に足を運び話を聞くという重要性も知った。被災地域の住民の方があげる問題点のレベルは各家庭様々で、災害支援で介入するときはその家庭がどのようなレベルの状態にあるか（衣食住の問題か、社会的なコミュニティーを強化するか、個人個人の基本的支援・こころのケアか、専門家によるサービスが必要かなど）を見る必要があることも学んだ。また、相手の困っていること・本心を聞き出すには、信頼関係の中でコミュニケーション能力を高め、地域特性を理解することが大切で、これは将来、問診を行うときに通じるものがあると思った。聞き取り調査を行うなかで、話をお伺いしていた最中、相手方が涙を流してしまう場面があった。事前学習（PFA）で学んだ、「傷つけない」原則を意識していたが、どううまく言葉をかけていいのかが分からなくなった。その後のグループでの振り返りの中で、共感しつつ沈黙をうまく使うことも学んだ。

２日目の南阿蘇中学校での実習でも、学習支援を通じて、質問できる雰囲気を作ったり、相手の反応を見ながら一方的な説明になるのを避けたり、表面上にとらわれず相手の気持ちを引き出したりすることの難しさを知った。これも、１日目の実習と同じで、将来患者さんを相手にしたときに通じるものがあると思った。生徒との交流の中でも、震災で社会的に特に大きな被害を受けたと思われる子ども、はじめはどう接していいかという不安もあったが、逆に私たちが元気をもらえるほどで、精神的回復力を伸ばしつつケアを怠らないことも大切であると知った。

３）この実習の全体的な感想

今回の実習を行うまで、私は医療面から熊本地震について学んだり、実際被害が大きかった地域を訪ねたりする機会がなかった。地震から４か月経った今、テレビや新聞でしか見てこなかった益城町や南阿蘇を実際にこの目で見て、直接住民の方の話を聞くことで、地震が人々に及ぼした影響は想像以上のもので、益城の仮設住宅にいらっしゃった方々が口にしていた「元通り」になるにはまだまだ長い道のりであると感じた。益城の仮設住宅での聞き取り調査や、南阿蘇中学校での交流などは私にとって大変貴重なもので、意義のある実習であったと思う。

４）これらをもとに、今後の学習計画、目標

今回の実習では、地震のとき実際にどのような医療が展開されたかを知り、また被災地域での活動を通じて将来どのような医師像が求められるかの振り返りを行ってきた。その中で、特に地域医療に従事するということは、その地域住民の方の命を担う、という責任があることを改めて学んだ。地域の特性をよく知り、万が一の災害のため事前の備え・研修・訓練を行っておくことは重要であると思った。将来熊本は地震でなくても、災害がおこる可能性は否定できないため、これから災害時の医療について学んでいくことも重要でないかと思った。

熊本大学医学部3年　　川中　みなみ

1、震災後の益城、阿蘇の現状の把握、阿蘇地域の中学校の現状の把握と中学生との交流

2、この実習を通して、阿蘇地域の中学校に行かせていただいて、先生方のお話で震災直後の状況や大変だったことを聞くことができた。また、現在の中学校の状況や学校周辺の状況、さらに、生徒のみなさんの生活が震災によりどのように変わったのか、それに対する学校の対応なども聞くことができた。生徒の皆さんとの交流により、阿蘇の中学生がつらい面もあるとは思うが、震災後も元気にたくましく生活していることを感じとれた。益城での仮設住宅の聴き取り調査には参加することができなかったが、調査の結果から仮設住宅に住まれてる方々の苦悩や願いを知ることができた。

3、今回の実習を通して、まず、仮設住宅での聴き取り調査からまだまだ益城地域では生活で苦しんでいる方が多く、行政や医療からの支援がもっと必要であると感じました。仮設住宅での暮らしが長期に渡ることで暮らす方々の健康面で気にかける部分もかわりつつあり、それに伴って医療従事者も支援の仕方も変えていかなければならないのだと学びました。また、中学校での実習では、先生方が震災後直後のお話をしてくださり、先生方自身もご家族があり大変な中、道路の寸断で迂回して学校に向かわれたとのことでした。阿蘇にいた中学生たちは本当に怖い思いをしたと思います。それでも、元気に学校生活を送っていて、私達大学生にも気さくに話しかけてくれて、生徒の皆さんを見て私たちが元気をもらいました。

今回の実習で今まで以上に阿蘇、益城地域の現状を知ることができたと思います。この経験を今後の勉学や医師としての仕事で生かしていかなければならないと思います。

4、今後、どのように今回の経験を生かせるかを考えると、学生の間は目の前の勉学に励み、また今後復興活動でできることがあれば積極的に参加していきたいと思います。

また、医師となってから、また今回のような震災が熊本に限らずどこかで起こるかもしれません。そのときにいち早く駆けつけられるよう、今回学んだことをしっかりとこころにとめ、行動していかなければと思います。

実習でうかがった被災地域の方々の願い、想いを将来活かせる医師になりたいと思います。

熊本大学医学部3年　　吉田　龍也

・当初の実習目標

熊本地震が人々の活動にどのような影響を与えているのかを知る。

今後震災があった熊本においてどのような医師像が求められているか考える。

・この実習でできたこと、できなかったこと

益城町のテクノ団地で聞き取り調査に参加させていただいた。質問項目に沿って居住者の方々の生の声を聞くことができ、非常に貴重な経験となった。しかし、質問項目以外のことまで話を広げることはできなかった。また、南阿蘇中学校を訪問し、教職員の方々との意見交換、中学生の方々への学習支援と交流をさせていただいた。教職員の方々からは、地震発生から授業再開、現在に至るまでの経緯を詳しくお聞きできた。報道されていない貴重な情報も多く含まれていた。中学生の方々とは交流を兼ねたゲームや宿題のチェックをさせていただいた。あまりこちらから声をかけることができなかったのは心残りである。

・この実習の全体的な感想

聞き取り調査では、テクノ団地居住者の方々の実情の一端ではあるが、知ることができてよかった。仮設住宅を用意してもらえたことへの感謝を感じつつも、大小様々な不満も感じている印象であった。限りあるスペースに多くの方が住んでいるため、当然のことと思う。また、地震から約4カ月が経った現在でも避難生活を続けている方々がいまだ多くいらっしゃることに思いを馳せると、胸が痛くなる。1日でも早く元の生活に復帰なさることを願ってやまない。

南阿蘇中学校でも、熊本地震が教職員や生徒の方々に及ぼした影響の一端を知ることができた。教職員の方々は自らが被災者であるにもかかわらず、生徒の安否確認など多くの対応に追われ、その心労は想像に難くない。お忙しい中、時間を割いていただき、非常にありがたく感じる。中学生の方々は地震の影響を感じさせないくらい明るく元気で、その姿にこちらが元気を貰った。学校では辛い気持ちを隠して気丈に振る舞っているのかもしれないが、非常に頼もしく感じた。熊本地震は生徒の方々の生活や進路に大きな影響を及ぼしたかもしれないが、これからの活躍を心より願う。この３日間を通じて、熊本地震の影響や求められる医師像を考えることができた。このような貴重な機会を設けてくださった指導員の先生方、熊本県関係者の皆様、実習先の仮設住宅の居住者の皆様、南阿蘇中学校の教職員と生徒の皆様に心より感謝申し上げます。貴重な経験をありがとうございました。

・今後の学習計画、目標

私自身も熊本地震の被災者の一人であり、マンションが居住不可能になり、引っ越した。益城町や南阿蘇村の方々ほどではないが、大変な思いをした。辛い経験ではあったが、同時に貴重な経験であったとも思う。被災時にどんな気持ちになったか、どんなことで困ったか、身をもって感じた。今回の熊本地震のような大規模な地震は今後どの地域でも起こりうる。そのときに被災経験を活かし、行動を起こせる人間になりたいと思う。そのために、地震発生後に頻発するエコノミークラス症候群やPTSDなどへの対応を含む災害医療を学びたいと思う。心身ともに衰弱しているときに、心の拠り所になれるような医師になるために、これからも頑張りたい。

熊本大学医学部4年　　山口　裕介

今回の地域医療実習は二週間にわたる試験の直前という日程だったため、欠席させてもらおうかとも悩んだが、今年じゃないと経験できない実習内容だったため苦肉の策として初日のみ参加させていただくこととした。しかし試験が終わってみると、どうせこんな出来なら全日程参加すればよかったと後悔してしまった。

さて、初日の実習は益城町のテクノ仮設団地での聞き取り調査の手伝いだった。これは仮設に入居している方に、現状や不満、仮設後の希望などをお聞きするもので、今後の復興計画などに役立てるために熊本大学政策創造研究センターの円山准教授が中心となり進められているものだ。

実際に調査を始めるまではけっこう簡単そうだなと思っていたが、始まってみると大きな間違いだった。まず炎天下。お借りした麦わら帽子がかなり役立ってくれた。聞き取り自体ではつらいことはなかったが、とにかく暑くて大変だった。そして、思っていた以上に時間がかかってしまうこと。丁寧にお話を聞いているとすぐ20分くらいは経ってしまう。調査する側も調査される側も少なからず負担になると感じた。これを各世帯調査して回るのは相当なマンパワーが必要だろうと思う。

聞き取る役はほとんどペアを組んだ工学部の方にお任せしてしまったが、やはりいろんな方がいらっしゃるので上手く会話を繋げつつ調査項目も聞き出すというのは難しいということがよくわかった。特に、口の重い方に対してどこまで踏み込んでいいものかの見極めが難しいと思った。無難にしようとするとあまりにも事務的なやり取りになってしまい、意見や思いを拾い上げることができずに終わってしまう。こういったコミュニケーション能力は医師としても求められるものだと思うので、ぜひ身につけていきたい。

今回最も感じたのは、いろんな人がいるなぁということ

だった。一口に「被災者」といってもその年齢や職業、家族構成などはそれぞれ異なっており、必要としている環境、要望なども違う。医学の勉強（特に試験勉強）をしていると、こうだったらこう、みたいに型にはめる思考ばかりが身についてしまいそうになる。しかし単なるパターン認識だけなら、最近話題になっているように人工知能の方が余程効率的にこなすだろう。人間の医師が必要とされるには疾患だけを見るのではなくて、それぞれの人を広い視野で見て最適な対応をする必要がある。そのことが難しいということもわかったが、常に意識することで少しずつでもできるようになっていこうと思う。しかし基本としてはパターン認識も必要なはずなので、普段の勉強も疎かにならないようにしたい。

熊本大学医学部5年　　岡田　雄二朗

①当初の実習目標

この実習に向けていろんな準備をしてきましたが、特に被災をされた方と話す際の対応する方法としてPFAについて学びました。このPFAを実践することを目標の1つとしました。

それから、地震が起こってからどんな対応をされたのかを現場で活動した方々から伺うことを２つ目の目標としました。

②この実習で、できたこと、できなかったこと

PFAの説明を行う時間をとって頂いたのですが、十分に理解してもらったかどうも自信がないまま終わってしまった。10分という短い時間だったので、全体を通して説明するよりももっとポイントを絞って説明することもできたかなと思いました。

益城町での聞き取り調査では特に問題なく入居者の方々からヒアリングができました。１年生２人も上手に話を聞けていたと思います。話を聞くなかで感じたのは、たくさん話をしてくれる方もいれば、あまり話したがらない人もいる、地震というイベントから立ち直るまでの時間は人それぞれ異なっていることを実感しました。話を伺った件数も少ないので一概には言えませんが、夫婦で入居されていたりして、他人とのコミュニケーションがとれるような人は比較的立ち直っているような印象を受けました。

③この実習の全体的な感想

今回の実習は被災地で行う従来とは違った地域医療実習でしたが、地域医療が抱える課題と共通する部分も多いように感じました。医療施設の中だけでなく、積極的に地域に出ていき様々な関係機関と連携し、地域全体を俯瞰するような姿勢が必要だと感じました。

④これらをもとに、今後の実習計画、目標

今後の目標として、医学の勉強はもちろんですが、地域医療に関わる医療の制度や、介護・福祉などについても興味をもっていきたいと思います。

熊本大学医学部5年　　中村　菫

(1)当初の目標

益城の仮設住宅での聞き取り調査で現在の震災の影響を理解すること

(2)実習でできたこと、できなかったこと

実際に聞き取り調査を行ったことで、住居者の方にどんな影響があったのか、どんなことを不安に思っているかなどの現在の心境を直接聞くことができました。しかし、これからのことはまだよく分からないという声が多く、これからのことはこちらから質問形式などをとってもう少し詳しく聞けたらよかったと思いました。

(3)全体的な感想

今までの実習とは異なり、今回は益城の仮設住宅で聞き取り調査という貴重な体験をすることが出来ました。実習前までは、震災から今までの期間でたくさんメディアからの情報だったり、実際に自分も被災したことから思うこともあり、益城の仮設住宅での住居者の方の今思っていることはこんなことかなと想像してるところから大きく変わることはないと思っていました。1日しか参加できませんでしたが、直接話を聞くことが出来て、自分が思っていたことと一緒のところもありましたが、心境だったり、生活の変化の面では特に違うところも多く、百聞は一見に如かずであることを痛感しました。

(4)今後の学習計画、目標

この経験を無駄にしないように学んだことをどこかに発信するなどのような何らかの別の形に表せるようにしていきたいです。

熊本大学医学部5年　　松岡　隼平

早いものでこの実習も5回目となり自分が最上級学年として後輩を引っ張っていく立場となった今年、自分たちでどのような実習にしたいか考えろと言われて、今年起きた平成28年熊本地震がまず頭に浮かんだ。災害と医療は切っても切り離せない関係にある。災害時や、災害後の医療などは現場で動いたものしかわからない経験がたくさんあるであろうし、ましてや自分の住んでいる地域がこのような災害に見舞われることなど非常に稀なことである。ここに今年の実習を益城・南阿蘇でしようと決めた理由はある。

今年と同じ実習がまた来年、再来年にできるだろうか？この大きな地震を経験して間もない今年でしかわからないこと、できないことがあるのではないか。そこでこの実習をするにあたってまず自分が目標に決めたことは、「地震後の現状・対策を把握・考察すること」であった。

実習内容は簡単なものではあったが、実際に仮設住宅や被害の大きかった地域で生活されている方々の声を直に聞くというのは非常に意味のあることだったと、終わってから一層そう思った。仮設住宅で生活されている人みんなが求めていること、個人個人が求めていることは様々であり、

仮設住宅の生活に満足されている方もいれば、強い不満を漏らす人もおられた。しかし私の印象は、意外に不満を表面に出さない人が多かったということである。生活再建や情報網の確立など聞けばそれらのことをもう少し力を入れてほしいと言われる方が多かったが、仮設住宅での生活そのものには感謝をしているという方が多かった。やはりそれほど避難所や車中泊での生活の不安は大きかったのだろうということが想像できた。

できなかったこととしては2泊3日の実習だったため現状と対策を考えるだけで、実際にその後のケアの部分まで見ることはできなかったということであるが、今回の実習の目的が、「地震後の現状・対策を把握・考察すること」であったので、今回はそれは良しとした。

今回の実習の自分の全体的な感想は、悪くないと思った。その一番の理由は、1，2年生も中心となることができる実習内容だったからである。実際の現場で初対面の人に話を聞きだす、というのは医師にとって必要とされる能力の一つであると思う。仮設住宅の聞き取り調査では全学年が満遍なくその役割を果たし、実際の経験として各々が学ぶことがあったのではないだろうか？繰り返すが、下級生が積極的に実習に参加できていたようで私は嬉しく思った。

今後すべきだと思うことは、上級生は下級生に教える、下級生は積極的に参加する、というスタンスの集まりである。今回自分が実習内容を考える上で下級生にも有意義な実習にするにはどうしたらいいか、実際にどんなことを教えるか、いろいろ考えることで自分の勉強にもなった。5年で自分が引っ張っていく立場となって初めて教えることが自分の勉強になることを実感した。これをこれからの後輩たちには実践してほしいと思った。今回の実習で学んだことは、実際の現場を見ることの大事さである。テレビではすっかり報道もされなくなっても、完全にニーズが満たされているわけではないということが今回わかったと思う。

この実習は、毎年夏にある。後輩達には今までの実習で学んだ事を、これからのゼミでの集まりや実習、そして医師になってからも活かしてほしい。もちろん私もである。

一番早い目標としては次のゼミの集まりでいろいろ考えたいと思う。

あと、後輩たちに一つ謝りたいと思う。毎年懇親会では私がなにかしら余興を担当することが多かったのだが今年は体調が非常に優れなくてその余裕がなく余興がなしになってしまったことを深くお詫び申し上げたい。来年もし日程が合えば懇親会だけは参加して余興を担当させてもらうのでよろしくお願いします。

最後になりましたが、地域医療に携わる先生方、クリクラでも地域医療は選ぶと思うので、その時はまたお世話になる先生もおられるかと思います。その時はよろしくお願いします。5年間ほんとにありがとうございました。

熊本大学医学部5年　　森脇　健次

1）当初の実習目標

・益城や南阿蘇村の被害とそこから地域の問題点を知る

・被災された方がどのような感情を抱いているのか知る

2）この実習で、できたこと、できなかったこと

益城と南阿蘇の被害状況やその時の対応について、実際に最前線で活躍された方々の話を聞く中で、災害時にどういったことが問題となってくるのか、多少なりともイメージすることができました。やはり、どの方も言われていましたが、情報を如何に迅速かつ正確に伝えられるかが重要だと思いました。混乱の中で情報を仕入れる、または送ることのできる人と人との繋がりを如何に持つかが肝要だと思います。そのためにも、この実習もその機会だとは思いますが、普段からの人との出会いを大切にしなければならないと感じました。できなかったこととしては、テクノ団地での聞き取り調査で、本当に居住者のことを想って話せていたかということです。聞かなければならない項目を聞くことに気をとらわれすぎるあまり、居住者の話したいことを全て聞く前に次の質問に移ってしまったり、答えづらい質問をしてしまったり、また、時間をかけすぎて迷惑をかけたりと、忙しい時間を割いて答えて頂いているのに、私たちの配慮が不十分であったのではないかと思います。このことは、医療面接においても同じようなことが言えると思います。精進していきたいと思います。

3）全体を通しての感想

今回の実習で被災した爪痕の残る地域へ行くことができて、とても貴重な体験となりました。仮設住宅がどのようになっているのか初めて見たのですが、仮設住宅に住んでいる方々は、震災前と比べると不便で窮屈な生活をされているのだと思います。話を聞いたときは、「周りの方とも仲良くしています」とか、「住むところがあるだけで十分です」と言われていましたが、自分が今まで居た場所が奪われ、今後の見通しも立たない状況は多大なストレスであると思います。まだ、私に何ができるのかはわからないのですが、少しでも早く復興ができるように考えることや、今後、熊本に限らずこのような状況に陥った時にいち早く動けるような準備をしておきたいと思いました。また、上村先生のお話を聞かせて頂く中で、地域に責任を持って働いている医師は本当にかっこいいなと感じました。誰かがやるだろうではなく、自分がやるのだという一人立つ精神で奮闘することが迅速な行動に繋がるのだと思いました。私もこのような医師になれるよう、努力しようと思います。

4）今後の学習計画、目標

・熊本県の地域の特性を勉強する

・様々な人たちと出会う場を増やす

最後になりましたが、地域医療・総合診療実践寄附講座の先生方をはじめ、県庁の方々、上村ぬくもり診療所の方々、テクノ団地の皆様方など、実習に協力してくださった皆様方、貴重な体験をさせて頂き、誠に有難うございました。

Ⅱ 自治医科大学医学部医学科生

自治医科大学１年　　織田　ゆめ子

１）当初の実習目標

私は、この実習に参加するに当たって、３つの目標を立てた。まず１つ目は、実習に積極的に取り組むことだ。初めて参加するからといって受け身にならずに、この実習を通してより多くのことを経験し学びたいと考えた。次に、震災後の現状について実際に見聞きし、学ぶことだ。私は今回の地震を実際に経験しておらず、その後の状況についても家族や地元の友人から、あるいはニュースからしか知ることが出来なかった。そのため、地震が及ぼした被害や被害に遭われた方々の思いを直接見聞きし、今後熊本の復興に貢献するために自分には何が出来るかを考えたいと思った。３つ目は、適切なコミュニケーションをとることだ。この目標を掲げたのは、単に、将来医師になった時にコミュニケーション能力が必要となるためだけではない。震災に対する恐怖やつらい経験を抱えていらっしゃる方々にお話しを伺った時に、決して相手を傷つけることのないようにしたいと強く思ったからだ。

２）この実習で出来たこと・出来なかったこと

１日目の益城町仮設住宅テクノ団地における聞き取り調査では、相手を傷つけまいとするあまり、自らがコミュニケーションを取ることが中々出来なかった。しかし、お話しを伺っている時は、住民の方々のストレスが少しでも軽減すればと思い、単に調査としてではなく、相手の気持ちに寄り添うような気持ちで聞くことが出来て良かった。

２日目の南阿蘇中学校での実習では、１日目での反省であったコミュニケーションが上手に取れたと思う。先生方との交流の時間では、疑問に思ったことを積極的に聞くことが出来た。また、中学生との交流の時間では思ったよりも早く距離を縮めることができ、自分自身も交流を楽しむことが出来た。学習時間に勉強を教えただけでなく、休憩時間では談笑も出来てとても有意義な時間となったが、特定の生徒以外とはあまり話すことが出来なかった。

３）この実習を通しての感想、今後の目標

目標の振り返りとしては、１つ目の目標が中々達成出来なかったと考える。初めての実習ということもあり、終始上級生の方々に頼ってしまっていた。初めての経験が多く、難しいこともあったが、もう少し主体的に参加出来るようになりたいと思った。２つ目の目標については、この実習を通してしっかり達成出来たように感じた。実際に被害の大きかった地方の方々の現状を直接見聞きできただけでなく、様々な立場の方々の震災直後の活動やお気持ちを、講演を通して伺うことが出来た。今回の地震を実際に経験していない自分にとっては、このような経験を通して地元熊本の災難を初めて真に実感したように思えた。様々な方々のお話を聞いて強く感じたことは、熊本の復興には多方面からの協力が欠かせないということだ。そのため、熊本の医師には今後、県や地方コミュニティとの連携が今まで以上に求められていくと私は考える。私は将来医師になったとき、多方面とコンタクトを定期的に取ることで、熊本の完全な復興に貢献出来るような体制を作っていきたいと思った。３つ目の目標は、少しは達成できたと思うが、多くの課題が残った。まず、相手によって適切な距離感を変えなければならない。そのために、その人が不愉快に感じない程度の距離感を短時間で探り当て、保つ必要がある。このように、適切なコミュニケーションを取るのには、相手の機微な気持ちの変化も見逃さない観察力が必要であると思った。また、それ以上に相手をいたわる気持ちを持つことが大切なことだと思った。

今回の実習を終えて、今後の学習では何事にもきちんと向き合って取り組むことを大切にしたいと考えた。２日目の南阿蘇中学校での実習で、ある生徒から震災の影響により志望校を変えて受験せざるを得ないということを聞いた。そんな状況の中でも、一生懸命の受験勉強を頑張る姿を見て、たとえ目を背けたくなるような状況であってもきちんと向き合い、努力していきたいと思った。

自治医科大学1年生　　安川　賢司

１）実習目標

今回の熊本での研修において１年生は医療現場を見て回るのではなく、講演会を聴き、調査やボランティアを中心として活動してきました。そうした活動において、私は被災者の心に踏み込みすぎない会話をすることを第一の目標としました。

そして、第二の目標として今回の研修で学んだことを医師としての成長にどのように結びつけることができるのかを知ることです。

２）実習で、できたこと、できなかったこと

被災者の心に踏み込みすぎない対応をすることが第一の私の目標でした。益城町の復興における聞き取り調査を行っていて私はただ必要な質問事項だけを尋ねるということをしてしまいました。相手からしたら呼んでもいない人が突然押しかけてきて住宅のことについてだけを質問していくわけなので、早く終えて解放されたいとばかり思っていたかもしれません。相手の心に踏み込みすぎないというのはただマニュアルにあることだけをしていくのではなく、会話における相手への気遣いをしていくことなのだと気づかされました。

そして聞き取り調査の対象はほとんどが高齢者でした。高齢者になると室内熱中症になりやすくなるので、仮設住宅に移住したばかりなのも考えて健康状態にも気を配らなければならないというのにできていませんでした。

中学校では勉強を教えるという目的だったのですが、教えることができませんでした。ですが、中学生たちと明るくレクリエーションなどで楽しむことができました。中学校においては相手の心に踏み込みすぎない対応ができたと思います。

３）全体的な感想

相手のことをおもっての調査なのであれば、ただ用意された質問だけを述べていくのではなく、相手の体調や様子にも生活背景を考えたうえで気を遣うべきだったと反省しております。

阿蘇大橋の崩落による交通の不便は住民の生活に多大な影響を与えていました。地域医療をしていく中でアクセス性にも気を配っていきたいです。

４)今後の計画、目標

今後の目標として、生活や実習の場において医師として必要な能力を知る努力をしていきたいです。そして、学習は研修などにおいて消極的にならずに積極的な態度で様々な知識を吸収したいです。

自治医科大学2年　　浦川　朋也

1)当初の実習の目標

聞き取り調査、南阿蘇中学校では被災した方に直接お話を伺い被災時の肉体的・精神的負担を知る。また、PFAを行うための基本的な態度を学び、実習において実践する。講義では熊本地震直後に活躍された方々はどのようにして被災者の健康を守ってきたかを学ぶ。

2)この実習でできたこと、できなかったこと

益城町のテクノ団地での聞き取り調査では、被災して家を失い、仮説住宅での生活を余儀なくされる方々から直接お話を伺うことができた。聞き取り調査を通して仮説住宅の問題や行政に対する意見など様々な生の声を聞くことができたが、最も印象に残ったのは益城町の人々にとって地域コミュニティがとても重要だいうことだ。仮説住宅に住むほとんどの方が益城町に戻りたいとおっしゃっていたし、行政が地区ごとに仮説住宅に割り振ったことでご近所さんが近くにいて心強いとおっしゃっていた。益城町の地域の温かさを感じることができた。南阿蘇中学校での学習支援では生徒とのアイスブレイクのゲームや勉強を教える中で熊本地震と中学校の統合という稀で環境を一変させるような出来事を乗り越えようと頑張る生徒の姿をみることができた。また、自分の家庭や安全も顧みずに生徒のために奔走する先生方から生徒を思いやる愛情の深さを感じ、尊敬の念を覚えた。今回は学習支援ということだったので、生徒と地震の話をする機会はなく、生徒との触れ合いの中で婉曲的にしか地震の影響をみることができなかったが、子供達は震災をどう捉えてどう受け止めているのかを直接聞いてみたいとも思った。

3)感想

夏季実習に参加させて頂くのは今年で2回目ですが、私は去年よりも充実した3日間だったと思います。学年が上がると病院での実習は増えますが、熊本地震で被災した方々に直接お話を伺うことは本当に貴重で得難い経験だと思います。今回この実習を計画して下さった高柳先生をはじめとする熊大地域医療・総合診療実践寄附講座の皆様に厚くお礼申し上げます。

4)今後の学習計画

PFAの理論に基づいた支援のテクニックを学び、機会があれば実践して将来災害時医療にも自信をもって携われるような医療人になりたい。

講義でも触れたが、国・都道府県・市町村それぞれと実際に支援を行う自衛隊や医療従事者との連携を図るための仕組みを学びたい。

自治医科大学２年　　千田　麻由子

1）実習の目標

今回の実習では大きく二つの目標を掲げた。一つ目は、被災当時についての講演を聞き、さらに実際に益城町のテクノ団地や南阿蘇中学校を訪問して、地震が被災地域の人々にどのような影響を与えているのかを知ること。二つ目は、震災があった熊本で、今後どのような医師が求められているかを考えること。以上を目標に実習に臨んだ。

2）この実習でできたこと、できなかったこと

«できたこと»

被災当時の様子を行政から、医療機関から、それぞれの視点でお話を聞くことができ、地震によってどのような影響が出ているのか、学ぶことができた。

«できなかったこと»

益城町の仮設住宅で聞き取り調査をしている際に、言葉につまり辛そうにしている方に上手く言葉をかけることができなかったことである。どう言葉をかければいいのかが分からず、ただ相槌を打つしかできなかった。このような時、適切な言葉で励ませるような人になりたいと思った。

3）この実習の全体的な感想

実習で伺った場所ごとに、そこで抱えていると分かった問題と感想をまとめていきたいと思う。

まず、益城町の仮設住宅で生活している方についてである。テクノ団地で暮らしている多くの人の家が全壊か大規模半壊であるため、現在の自分の家のがれ木撤去の状況や、いつ撤去が終わるのか、またそこに家を建て直せるかどうかなど、住居についての不安や、今後生活がどうなっていくのかという将来への不安が多く聞かれた。

南阿蘇中学校に通う中学生は地震後とは思えないように元気だった。先生によると、仮設住宅から通う生徒も多くいるそうだが、精神的な強さを感じた。中学3年生の中は、今回の地震で道路が寸断され、熊本市内への通学が難しくなり、行きたい高校を諦めざるを得ない生徒もいた。被災地域の環境の厳しさを実感した。医療機関においては、

道路の寸断による通勤困難やストレスが原因で退職者も出たため、職員の方も迂回通勤を強いられる中、限界でやっている状況と聞いた。改めて、医療機関のスタッフの充実の重要性を感じた。今回の実習を通して、地震が与えた影響は様々な方面に及んでおり、四ヶ月たった今でもたくさんの問題が山積していることが分かった。

4）今後の目標

今回の聞き取り調査などで、直接人にお話を聞いてみて、人それぞれ違った悩みや不安を抱えていることが分かった。将来医師になり、関わる患者さんも同じように、人それぞれ悩みを抱えていると思う。そのことを理解し、一人一人に寄りそえる医師になりたいと思った。

また、地震の後、住居が変わっても、かかりつけ医に見てもらえた時の安心は非常に大きかった、というお話を聞いた。地域に対する責任感を持ち、自分たちが守るという使命感をもって働きたいと改めて思った。

自治医科大学2年　　辻本　一真

1.当初の実習目標

・震災に被災された方々との交流を介して、どのような生活の変化を受けているのか、どのような心理的状況かを知り、考える

・被災現場で活動なさっていた、活動なさっている方々のお話を伺い、被災状況における特殊環境での活動を知り、考察する

・それらのことを踏まえ、今後私たちが医師として必要であることを考える

2.実習でできたこと、できなかったこと

1日目行った聞き取り調査で、聞き取りを行う際にその言葉選び、話の運びに関して気を付けなければいけないということは事前に把握しており、しかし実際に立ってみて果たしてできるかというのは全くの別であった。言葉を選び過ぎてかもともとのスキルが無いのか話がうまくつながらずであった。しかし出来ない中でも自分の中でもともと予想していたよりはまだまともにできた方ではないかと思っている。

3.実習を通しての感想

聞き取り調査がテクノ仮設団地の方々であったため、ご自宅の被災状況は全壊という方がほとんどであった。また調査を行った時間帯の関係で調査を行えたのはお年寄りの方々が多かった。私のグループの聞き取りのことから振り返ると、震災のことを振り返ることを苦としているように見受けた方と、割とそうでもなく普通にお話しくださった方といて、前者は一人で仮設住宅に入られている方、後者はご家族などといらっしゃる方、という様な印象であった。仮設住宅自体がまだ開いてひと月経ってないくらいで、そちらの生活による声はまだ少ない状況であったが、いずれにせよ一人でいらっしゃるお年寄りの方にこの生活は後にいろいろな心身の健康問題につながると思った。

一方、南阿蘇中学校で行った交流では、学校の先生方だからこそできた行動の数々や、生徒たちの頑張り、その反面抱える心労などに触れることができた。当初、生徒たちへのかかわり方について大変心配していたのだが、実際は私たちと交流する中では被災者であるということを忘れてしまうほどに皆前向きに頑張っているということを見て驚いた。発表の際にも触れたが、表には隠している裏の、心の声というものにいかにして我々や大人が気付いてあげられるかという点が大切であり、今後の大事な問題点であると思った。

4.今後の目標

本実習を通して今後に繋げたいことは、第1はPFAである。聞き取り調査を行うにあたって私自身もかなり意識したことで、実際我々医療人やボランティアの方々にはなくてはならない考えである。最も、支援者側が最も心理的に傷付きやすいということや、支援者の方もまた被災者であるという観点はこの学習をするまで私の中には無かった考えで、いろいろと考え直させられたように思う。講師の方もおっしゃっていたが、ぜひ多くの方に知ってほしいものであると思った。

第2に、今後私たちが熊本で地域医療に従事する際にこの震災が人々に与えた傷というのは絶対に関わってくるものであり、これらをどう生かしていくのかということを考えていかねばならない。私がまだ臨床実習に出ていない、基礎医学を学ぶ中であるために生かし方を細かく考えるということは難しいが、できる限りで考え、また臨床実習に出た際に改めて見返せればと思う。

最後に、本実習を行うにあたって計画、準備、実行に尽力下さった関係者の方々、またご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

自治医科大学2年　　林田　夏南子

（実習の自己目標）

今回、地域医療実習に参加するにあたり、以下の3つの目標を立てた。

1、被災した方々の現状を知る

2、震災における医療人の役割について考える

3、実習を通して、求められている医師像について考える

（実習で、できたこと、できなかったこと）

まず、被災した方々の現状を知るということについては、1日目の益城町聞き取り調査の中で仮設住宅での暮らしの状況を知ることができた。聞き取り調査中に、買い物をする際は、バスや車などを利用して住んでいた地域のスーパーまで行っているなど、まだ入居してから日が浅いということもあり仮設住宅付近の店での買い物に慣れないため不便だという意見や、インターネット環境が整っておらず、仕事のために避難所までパソコンを持っていかなければならなくて不便だという意見をきくことが出来た。

もっとも多かった意見は、復興住宅についてや仮設住宅の現状などの情報をどうすれば得られるのかがわからないということだった。講演でも問題として本当に情報を必要としている人に情報を届けることが難しかったといことが挙がっていた。一方、良いと思うこととしては地域ごとに仮設住宅を割り当てたことが挙げられた。
隣近所を知っているという環境は安心感があり、ストレスも少なくなるということだった。

実際に聞き取り調査を行ってわかったことは、ただアンケートを書いてもらうだけでは得られない情報を直接お話を伺うことで得られるということを感じた。また、アンケートの内容をうまく話の流れの中で聞いていくということの難しさも改めて感じた。うまく話の流れを作ることができなかったのは反省点である。

被災者の現状を知ることについて、2日目の南阿蘇中学校での実習では、学校の統合のみならず震災の発生という厳しい状況の中、生徒たちはどのように過ごしているのか直接見ることができた。また、教師の先生方からお話を聞くことができ、医療人とは違う教師という立場から震災について知ることができた。

2つ目の震災における医療人の役割について考えるということに関しては、様々な先生方による講演の中で考えることができた。被害状況を確認し、必要な支援を要請することやボランティアの医師や看護師などを適切に派遣することなど地域の医師が中心となって動かなければならないことも多いということを学んだ。ただ医師・看護師が集まればよいということではなく、適切に派遣されるための体制が整っていなければならないというのは、医療従事者が平常時から災害時の対応について知っておくことがスムーズな対応のためには重要だと感じた。講演の中でDPATについてなど初めて知ることも多かった。

3つ目の求められる医師像については、災害時にどのような対応をすべきであるか知っているということはもちろん、予想していなかった事態にも柔軟に対応できる力と患者の搬送を行うかなどを決める判断力が必要だと講演などを聞いていて感じた。また、他の医療従事者と普段から信頼関係を結んでおくことも必要だと感じた。今後、仮設住宅における健康問題も出てくると思うが、問診などから健康問題や悩みに気付き、他の職業と連携しながら対応していくことが重要になってくると思う。

（実習の全体的な感想）

今回の地震を私は体験していないが、多くの方からお話を聞くことで震災後の現状を知ることができたのは良い経験になった。メディアからの情報では気付かない問題点など、やはり現場を訪れなければわからないことも多くあるように感じた。また、熊本地震では、東日本大震災での経験を生かせている部分も多くあったように感じた。過去の経験が今後につながるということを感じ、熊本地震も引き続き住民に対する聞き取りなどから問題点を見つけ、改善していかなければならないと思った。

（今後の目標）

聞き取り調査後のディスカッションで、同じ班の班員でもより多くの事に気が付き、考えていた人がいて、自分の洞察力がまだまだだということを感じた。また、今回の実習は人と直接触れ合う機会が多く、自分のコミュニケーション能力の未熟さを痛感する場面がいくつもあった。

これらの能力を今後の学生生活で身につけていきたい。

自治医科大学3年　　榎田　悠美

1) 実習の自己目標

1つ目に被災地域の現状を実際に現地の方との会話から、今必要なものを知ること、2つ目に南阿蘇中学校の先生や生徒との交流すること、3つ目にこの実習を通して、これから目指すべき医師像を考え、これからの生活に活かすこと、である。

2) 実習で出来たこと、出来なかったこと

初日では仮設住宅の現状を、住民の方と話すことで少し理解でき、支援金が来ない・コニュニティを作ってほしい・様々な情報が来ない・身障者に対する住宅の配慮が必要である・近所にスーパーがほしいといった、今必要なことが分かった。しかし、調査の時にメモすることに必死になってしまって住民の方とのアイコンタクトが疎かになってしまった。

2日目は、中学生とのレクリエーションや勉強会で元気な姿を見ることができた。一方、中学生に被災した後の今の心情や不安に思っていることがないかなどを聞くことが出来なかった。初対面の人に対して、腹を割って本心を話すことは難しいと思うが、どう聞けばよいのか分からなかった。今後の課題としたい。

3日目は、他グループの発表を聞いて、それぞれの班が、医療者の立場に置き換えていて参考になった。

3)実習を通しての感想

仮設住宅の住民の話を聞いて、まだ被災したことによる今後の住まいや生活面での不安があると思うが、現状を受け入れて精神的に安定しているように見えたので、安心した。しかし、今必要なことを伺ったときに、たくさんの意見を持っていらっしゃったため、これから改善していくべき課題だと感じた。また、お話していて被災地の状況や交通情報など知らないと会話が出来ないと分かったので、より被災地の状況について知る必要があると思った。中学校では、3つの学校が統合したばかりで、さらに新学期で生徒同士のこともよくわからないまま被災してしまい、大変な状況だったが、先生や生徒が強い気持ちを持って日々を過ごしていたことが分かり、感銘を受けた。

4)今後の目標

仮設住宅での住民の方との会話では、被災地の状況について知っていないと成り立たない部分もあったので、地域

で働くときには、その地域について深く知って初めて患者と話ができると感じた。今後に活かしたいと思う。また、中学生との勉強会では、私たち大学生が質問してもらえるような雰囲気を作ることが大切だと感じた。これは、私たちが医師になって患者と接するときに、分からないことを質問しやすい雰囲気を作り、信頼関係を構築できる環境を整えることに類似すると思う。これから、様々な先生の問診を見て勉強したいと思う。

最後になりましたが、夏季研修を企画してくださった熊本大学の先生、その他の諸先生方、事務の方々、本当にありがとうございました。

自治医科大学４年　　中原　大智

1.当初の実習目標

今回、実際に被災された地域で実習を行うということで、私は以下の実習目標を持って臨んだ。それは、被災された方々にこれ以上の精神的負担を極力かけず、少しでも健康面・精神面での不安を取り除いてあげたいとうことだ。ただ、私は地震当初栃木におり、地震がどれほどのものだったのかその経験が欠けていた。従って実習前は現地で被災された方々に寄り添った言動ができるか非常に不安であった。そのため、PFAという1つのガイドラインがあったのは非常にありがたかった。何故ならば私は、このようなガイドラインがあることを今回初めて知ったからである。事前にPFAについて学習した上で今回の実習に臨むことができたのは大きいものだった。

2.この実習で、できたこと、できなかったこと

住民の方と、調査することに加えてしっかりと会話を行い率直な意見を聞くことができた。またPFAに基づき被災者の方々の心に配慮した調査ができたと自負している。ただ、調査対象の方の中には、ファーストコンタクトの時点であまり心象のよくない方も多くそのような方から調査拒否をされたこともあった。ただ、こちらからもっと明るく寄り添った対応ができていれば態度を柔和させることもできたのではないかと悔やまれる。

3.この実習の全体的な感想

毎年のコトであるが、このように実際に将来勤務することになるであろう地域医療の現場を拝見し参加することができるのは今後に大きく役立つと思っている。特に今回は、被災地域医療という滅多に経験することのない現場に参加させていただいたことには感謝の念が絶えない。

ただ、やはり被災者の方々から多数の意見を伺った中で私達が今できることというのは本当に少ないもので、今の自分の無力さを痛感すると共に、このような方々の真の力になれるようこれから一層の努力が必要なのだと心新たにした。

また、熊本大学の方々とも親睦を深められたことは将来実際に働く上で大きな財産になると信じている。

4.これらをもとに、今後の学習計画、目標

今回、話を聞くということの難しさとその重要性を再確認させられた。4年生になり、実際に病院実習などで問診することには慣れていたが、此方から話を聞きに行くというのはなかなかに難しいものであった。そして人と人との信頼関係の大切さである。調査実習や病院実習などで様々な方から話を聞いたが、熊本震災において様々な業種の方々が協力し、事態の迅速な収束を行った。互いが互いを尊重し対話する姿勢を身につけること、今後もしっかり意識して取り組んでいきたい。

自治医科大学4年　　春木　紗良

今年度は熊本地震の被災地域での実習ということを聞き、初めは、2日間で何ができるのだろうか、被災者の方々の迷惑になるのではないかと不安が大きかった。自分は発災時に熊本におらず、実家も被害の少ない地域であったため、テレビで報道されている被災地の映像を見て、信じられない思いでおり、何もできないでいることにもどかしさを感じていた。

実習を行うにあたり、被災地の現状や被災者の思いを知り、今後熊本においてどのような医師が求められるかについて考えることを目標に立てた。

一日目の仮設住宅における聞き取り調査では、被災者の生の声を聞くことができ、貴重な経験をさせていただいた。

緊張もあり、調査票の内容を自然に聞き出したり、被災者の質問にうまく返答できなかったりはしたが、事前学習で学んだPFAを思い出しながら、被災者の気持ちを傷つけないよう配慮して聞くことはできたのではないかと思う。調査をして意外だったのは、仮設住宅での暮らしに対して不満を持っている人があまりいなかったということだ。むしろ、「抽選で外れている人もまだいるのに自分だけ仮設に入れていいのかと思う。」と涙ぐむ方もいらっしゃった。自らも被災して大変な思いをしているにも関わらず他の被災者を思いやることが出来るのはすごいと思った。しかし一方で、自分よりも大変な人たちがいるから、多少は我慢しなくてはいけないという思いが強いのかもしれないと感じた。臨床心理士による相談室のようなものを設置したりなど、被災者が悩みや不安をさらけ出すことのできる場所づくりが必要だと思った。

二日目の講演会や上村ぬくもり診療所等の見学では、甲斐先生や上村先生をはじめとする方々の医療従事者としての献身精神に感銘を受けた。また、特に災害医療の場では、多職種連携と医師のリーダーシップが重要だと感じた。災害はいつ起こるか分からないからこそ、常日頃からシミュレーション訓練を行い、連絡の取り方や現場での動き方などを地域の皆で確認し合うことが必要だと思った。

今回の実習を通して、被災者の心理ケアや災害医療についてもっと勉強しなければいけないと感じた。また実際に

被災地に行き、自分の目で見、耳で聞いて現状を知ることが非常に大事なことだと実感した。次回被災地を訪れるのは、来年の夏季研修や地域実習になると思うが、それまでに自分なりに災害医療等について勉強して、来年はまた違った視点で熊本の地域医療や被災地支援について考え、３年後熊本で医師として働くときに活かすことができたらと思う。

自治医科大学4年　　宮野　遼太朗

今年の夏季実習では、実習の目標として以下の3つを立てました。

①被災地の現状を見て確かめる

②被災された方の体験を伺う

③災害医療や被災された方との向き合い方を学ぶ

4月に熊本地震があったときは学校の授業やテストがありなかなか栃木から熊本に帰省するわけにはいかず、家族や友人の安否や実家の状況を電話やLINEで確認して、後はテレビを通してしか被災地の様子を知る手段はありませんでした。インターネットでもなかなか被災地の現状(仮設住宅など)はわからず、今回の実習を通して被災地の現状を知りたいと思い第一の目標にしました。

今回の実習では、被害が大きかった益城町と南阿蘇村で実習しましたが、全壊や半壊など被害の最も大きかったところには行くことができず、講演会での写真などを見て被害の大きさを実感しました。それでも、移動の車中から地滑りのために岩肌が見えている山々があったり、屋根をブルーシートで覆われた家などが多くみられ、被害の大きさを垣間見ることができました。

今回の実習で最も印象に残ったのが、南阿蘇村の仮設住宅(テクノ団地)での聞き取り調査です。この仮設住宅に住んでいる方は全員自宅が全壊や大規模半壊、半壊の方で、今もなお大きな不安の中で暮らされていました。ここまで復興が進んでいないのかという驚きと、同じ熊本県民であり、熊本の地域の現場で働く身でありながらその現状を知らなかったことに大きなショックを受けました。

自宅は全--半壊でがれき撤去の目途も立たず、仮設住宅の入居も2年までという制限がある中、支援金も届かず、情報もなかなか入らず、将来への見通しが立たないことに対する大きな不安を抱えられていました。お話をしていく中で、涙を流される方もおり、その際はPFAで学習したことを意識しお話を傾聴することを心掛けましたが、対話をしていくうえで大変な難しさを感じました。

1・2日目に行われた熊本地震の状況に関する講演会では、医療関係者や県の職員の方の対応を知り、遠く栃木にいたので分かりませんでしたが、本当に大変な苦労があったのだなと感じました。お話の中で、震災の上で一番大切なこと「メイスイキン」というフレーズを学びました。命と水、お金が大切だということで、これから震災医療に携わる際はそのようなことに留意して支援していきたいと思いました。

また、2日目には老人ホームや上村ぬくもり診療所を見学しました。被災して家が全壊してもなお老人ホームで責任感を持って働いている方も多くいらっしゃり、そういう方々への配慮・支援も必要だと思いました。

今回の実習を通して、まだまだ復興は進んでいない現状にあると感じました。それと同時に、被災地で懸命に働く方々がいらっしゃり、被災地の外から復興を目指して動いている取り組みが多くあることも知ることもできました。新聞やニュースの情報だけでなく、実際に足を運んだり、被災地復興に取り組んでいる方の話を伺うことでより現実味をもって熊本地震について知ることができ、本当に貴重な体験をすることができたと思います。

今後の目標としては、益城町や南阿蘇村をはじめとした地域で求められる医師になれるように、まずは臨床実習を通して勉強に励み、無事5年生に進級することが第一だと思います。被災地に今できることは多くはないかもしれませんが、将来医師として働き始めた時に震災などが起きた場合は、熊本地震で全国から援助をして頂いた恩返しとして、今回学んだことを活かして、できる範囲で、震災医療や物資の供給などの援助をしていきたいと思います。被災された方との対話は難しいと感じましたが、将来同じように心にトラウマを抱えた人と向き合っていく場面は必ず出てくると思うので、人の気持ちのわかる思いやりの心を持った医師になりたいと思います。

最後に、今回実習の計画を立てて協力してくださった、熊本大学地域医療・総合診療実践学寄附講座の先生方、県庁の方々に、感謝を申し上げたいと思います。

例年と異なる企画で困難なことも多くあったと思いますが、貴重な経験ができました。本当にありがとうございました。

自治医科大学5年　　井上　大暉

5度目の夏期研修も無事に終えることが出来た。本年度の夏期研修は益城、南阿蘇地域という事で、先日の熊本地震をうけての実習となった。今回の夏期研修にあたって私は自己目標を立てた。1つ目は現在の状況を肌で感じ考えること、2つ目は自分の将来を想像しながら有事の際に医療者として何ができるのかを感じることである。

初日は実際に発災後に動かれた方々の講話の後に仮設住宅での聞き取り調査を行った。講話では発災時の写真も多々あり、自身で体験していない自分にとっては衝撃的なものも多かった。どの方も未曾有の事態に最初はわからなくてもやらねばならないという手探りの状態から対応を始められていた。しかし、全国からDMATをはじめとする様々な支援が集まってくる中で、現場の方の踏ん張りで今の熊本があるのだと感じた。

聞き取り調査は初めての体験だった。住民の方の要望を拾い上げることと、役場職員の方達（この方たちも被災者である）の奮闘とのバランスを考えると難しいものがあると素直に思った。これから、状況が進んでいく中であまり利己的にならないように、ただし本当に必要な支援はなされるように、線引きをするのが非常に難しいことだと思うが、「助け合い」が大事だと感じた。

2日目は講話の後、南阿蘇地区の上村むくもり診療所等の施設で実習を行った。先生より立野病院が発災時に直面した事態およびその時の対応についてお話いただいた。そのうえで実際に施設を見学させてもらった。ここでも自身も被災しているが出来るだけ以前と変わらないサービスを提供できるように奮闘しておられる方々の姿があった。先生も限られた資源の中で在宅医療に力を入れておられ、多職種での「助け合い」がなされていると感じた。その一方でやはりスタッフ側の負担の大きさも感じられたのも事実であった。

最後に、今回の研修を最初に立てた目標に準じて振り返りたい。まずは現在の状況を感じることに関してだが、バスに乗っているだけでもやはり否応なく目に飛び込んでくる景色もあったし、実際に聞くまではわからなかった現場の苦悩も感じることが出来た。さらに毎年夏期研修でキーワードとなる「コミュニケーション力」が、聞き取り調査では大切だった。相手の様子を見て、あるいは「空気を読んで」話し方や内容を対応させることができたと思う。次に、医療者としてできることであるが、これは特に講話や2日目の実習で大きな刺激をうけることができた。

医師は大なり小なりのチームのリーダーになることが多い。周りの人たちと連携しながらリーダーシップをとっていかなくてはならない職業だと改めて感じた。広い視野で他人を労わることができる力、その場にいる人たちと手を取り合って連携していく力、状況を見極める力、いろんな力が必要になると思うが、自分の持つ理想の姿に近づけるように成長していきたい。

本当に最後になってしまいましたが、熊本大学医学部附属病院・地域医療・総合診療実践学寄附講座の松井先生をはじめ、この研修を支援してくださった方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。

自治医科大学５年　　松森　千里

今年で５回目、学生最後の夏季実習となった。

当初の目的は、被災現場の声に耳を傾け、今一番必要とされていることは何かを考えることであった。シンプルな目標ではあったが、地震発生当時、熊本の地にいなかったからこそ、熊本の地で起きた真実をありのままに知りたいという思いは非常に強かった。

この実習でできたこととしては、２日目午後の実習で地震当時の立野病院の動き、およびその後開院された上村ぬくもり診療所の働きを、院長先生から直接お聞きすることができたことである。熊本から離れていた分、メディアからのみの限られた情報しか入手できず、その情報に関してもすべてが正しいとは限らないこと、またときに偏ったものであったということにも気づけた。

できなかったことを挙げるとすれば、例年よりも実習期間が短く、慌ただしく終えてしまったことである。実際に、南阿蘇のグループホームにて訪問診療を行うことができたが、欲を言えばもう少し長く、じっくりと患者さんと向き合う時間が欲しく感じ、少し心残りであった。最後の夏季実習だという思いが強かったのもあるかもしれないが、それだけ被災地での訪問診療は自分の中で大きな経験であったし、“患者さんを診る”という意味の深さを実感させられるものであった。

長期休み明けには栃木に戻り、これまで通り病棟実習をしていくことになるが、今回の実習での貴重な経験から得たものを同じ自治医大の仲間に伝えたいと思っている。仮説住宅の住民の方々の心の声、阿蘇の医療現場の現状や浮かび上がった問題点は決して熊本県だけの問題ではなく、他県の方にも知ってもらう必要があると思うからである。また、将来熊本で医療従事者となる私たちだからこそ、今後の災害医療の仕組み作りなど、これからの医療にも積極的に取り組んでいくべきだと思っている。まずは、２年後の無事に卒業し、熊本で医師として少しでも多くの人の力になれるよう、充実した学生生活を送っていきたい。

最後に、今回実習にご協力くださった方々、実習の計画・ご指導等してくださった熊大地域医療・総合診療実践学寄附講座の先生方、県庁職員の方々、本当にありがとうございました。

4．平成28年度卒業生

熊本県医師修学資金貸与学生　熊本大学医学部6年

＜地域枠＞

- 篠塚　大
- 松原　顕太
- 的場　祐二
- 宮崎　蒼

＜一般枠＞

- 入江　晃士朗
- 河野　達哉
- 木下　聡
- 白川　真実

熊本大学医学部6年　　木下　聰

6年に及ぶ熊本大学での医学生生活は非常に楽しいものでした。医師として働くために学習する内容が濃密で多岐にわたっており私にとって勉強面で苦しむことが多かったですが、その中で友人たちと励ましあって勉強したり、一緒に部活動を頑張ったりと楽しいことも感動することも多い時間を過ごさせて頂きました。これらができたのも熊本県の皆さまからの医師修学資金のおかげだと感じております。金銭面でほとんど苦労することなく安心して学業に励むことが出来ました。4月からは医師として熊本大学で学んだことを県民のみなさまに還元できるよう、一生懸命励んでまいりたいと思います。そして患者さんとそのご家族、一緒に働く医療スタッフから安心され、信頼され、尊敬される医師になれるよう努力していきます。最後になりましたが、指導して下さった松井邦彦先生をはじめ地域医療・総合診療実践学寄附講座の先生方、スタッフのみなさまに感謝申し上げます。お世話になりました。ありがとうございました。

熊本大学医学部6年　　篠塚　大

医師国家試験の最終日、帰りのバスの窓からぼんやりと外を眺めていた。試験会場から帰る途中に、私の母校である文徳高校がある。試験中の3日間は心に余裕がなかったが、無事試験が終わった帰路では、こうして母校の教室を眺める余裕も出てくる。高校時代の彼らは例外なく卒業後の将来への不安に揺れていると思う。ここ最近は試験に合格することだけで頭がいっぱいになっていたが、合格したらとうとう社会に出ることになる。今の自分が新しい環境に通用するのだろうか。高校を卒業する時期と同じ感覚になっていることに気付いた。ただ、あれから何年も経った今の自分なら気付くこともある。高校時代は将来のために一所懸命に努力していたが、それは今振り返ると結局は自分自身の為だったように思う。自分の力で大学に入学できたかのように思ってしまっていたのかもしれない。しかし、今なら想像できる。どれだけの人が応援し、協力してくれたおかげで、今の自分があるのか。もっと言えば、こんな私でも医師を志すことができる医学教育システムが確立するまでに、計り知れない時間と労力をかけてきた歴史があるはずだ。私が出会ったこともない現在あるいは過去の人々があるからだと心から思う。熊本の地域医療に従事することを支援してくださる今のこの環境は、それに気付けるのに本当に恵まれている。毎年の地域医療実習では、いかに病院が町の中で重要な位置にあるのか、実際に現地に赴かなければわからないことを、学生のうちに体験させていただいたことは幸運だった。最も高校時代と違うのは、今から私は社会に出て、その歴史を作る側になるチャンスを得られるということだ。多くの方々に支えられているということにようやく気付けた今、次は私がその感謝を医療に貢献することで具体的に還元していきたいと強く思う。みなさんの期待に沿えるよう頑張ります。6年間本当にありがとうございました。

熊本大学医学部6年　　白川　真実

6年間多くの方々にご支援頂きありがとうございました。私は地方で生まれ育ったこともあり、地域医療に興味がありました。在学中はあまりゼミに参加することは出来ませんでしたが、夏季実習では直接地域の住民の方々や地域医療に貢献されている先生方のお話をお聞きすることができ、非常に勉強になりました。

また、ゼミを通して多くの先生方、先輩方と繋がりをもつことが出来ました。様々な考え方や方向性に触れ、自分の考えの幅も広がりました。

4月からは地方の病院で初期研修をさせていただきます。臨床実習に伺った際に、ゼミでお世話になった先生方に教えていただきました。そのお話を聞き、非常に魅力を感じ、その病院で研修したいと思いました。実際に自分が医療者として地域医療に携わることになります。6年間で学んだことを生かしつつ、地域医療の在り方についても自分で考えながら勉強していきたいと思います。

最後になりましたが、6年間様々な面でサポートしていただきました多くの方々に感謝申し上げます。

熊本大学医学部6年　　松原　顕太

私は2010年春、熊本大学医学部医学科に入学いたしました。2017年春に晴れて卒業となりましたので、18歳だった当時から7年間が経過したのかと思うと、時の流れの早さを恐ろしいほどに感じます。7年間と申しますのも、私は恥ずかしながら勉強不足から1年間の留年を経験いたしました。18歳の私は、熊本県や住民の皆様ほか様々なお支えのもとで学業をさせていただいている身分にあるという大切なことを理解しておらず、関係する方々に多大なるご心配とご迷惑をお掛けすることとなってしまいました。しかし、修学資金貸与を受けながら留年してしまったことは、私にとって色々なことを考え直し、様々な物事に積極的に挑戦するきっかけとなりました。講座の先生方にも非常によく目を掛けていただき、支えていただきました。地域枠という身分にあったからこそ、本来マイナスであることを自分にとってプラスに転じさせられたのではないか、と今振り返ってみてひしひしと感じている次第です。「自分にとって」という部分は特に強調しなければなりませんが、その点ご容赦いただけると幸いです。今までお世話になってきた方々や熊本県の皆様のために、かつ自身のさらなる成長のために精一杯、4月からスタートする医師としての生活を送っていく所存です。

熊本大学医学部6年　　的場　祐二

6年間という途方もなく長く思えた大学生活も、終わってみるとあっという間だったように感じられます。この6年間は、特に何かを成し遂げることもなく、大きな失敗も挫折もなく、可もなく不可もなかったという印象です。マッチングには失敗しましたが…。しかし結果的には、無事に卒業でき、国家試験もおそらく合格し、4月から研修できそうなのでホッとしています。

正直に言って、楽しい思い出があまりないので、この6年間の大学生活の中で、僕が後悔していることをいくつか書きます。何かの拍子に誰かの参考になれば幸いです。

まずは、もっといろんな人と関わっておくべきだったということです。僕は大学1年目で部活を辞めてしまい、その後、自分の世界にこもりがちになってしまいました。そういう状態では、友達は増えないし、彼女もできません。狭い世界に生きていては、新しいことを経験する機会もあまり持てず、知見が広がらず、コネもできません。部活をやめた後も、何かしらのコミュニティに所属しておくべきでした。僕のような出不精な人間は尚のことです。

次に、もっと遊んでおくべきだったということです。僕は、バリバリ勉強していたわけではなかったのですが、かと言って遊ぶこともあまりせず、何をして過ごしていたのか自分でも思い出せないような、茫然とした6年間を無為に過ごしてしまいました。月並みな言葉ですが、自由な時間のある大学生のうちにしかできないことを、沢山やっておくべきだったと痛切に感じています。

最後に、何か一つのことに本気で取り組んでおくべきだったということです。僕は飽きっぽい性格で何事も長続きせず、
あれこれ手を出しては、中途半端なところで辞めるというのを繰り返し、その結果、6年間もの大学生活を終えたというのに、今の僕には大して何も残っていません。もし、6年間部活に打ち込んだり、何かしらの趣味に精力を注いだりしていれば、得られるものもあったことでしょう。情けない話です。

ネガティブなことばかり書いてしまいましたが、最低限やるべきことはやってきたし、これはこれで別に良かったんじゃないかという思いもあります。大学を卒業してからは、もう少し積極的に自分の人生に取り組んでいきたい所存です。応援よろしくお願いします。

熊本大学医学部6年　宮﨑　蒼

期待と不安を胸に抱いていた入学式から6年が過ぎ、次は医師としての一歩を踏み出そうとしています。この6年間を振り返ると入学直前に起きた東日本大震災、そして昨年起きた熊本地震など、今でも傷跡を残す大きな地震から、STAP細胞や耳の聞こえない作曲家のようなよくわからない事件まで様々な出来事がありました。しかし、自分の医学部生活を振り返ると勉強と部活しかしていなかったのではないかと錯覚するくらい何も思い出が出てきません。ですので、この6年間で感じたこと、新たに気づいたことについて書いていきたいと思います。

まず、時間が経つのはどんどん早くなっているということです。小さい頃はあれほど長かった一日が、今ではあっという間に朝が来て昼が来て日が沈みまた朝が来るように感じます。そしてそれに合わせて、課題の期限、定期試験、部活の大会、国試といった試練が雪崩のごとく迫ってくるように思えました。だからこそ一日一日を大事に過ごし、積み重ねることが大事だと思いました。

そして、医学の勉強は面白いということです。医学を勉強することは、最も身近である自分の身体について勉強することでもあると思います。最初は訳も分からず試験のために暗記していた知識も、勉強を続けることで、その意味がわかり、応用できるようになりました。そして解剖、生理、臨床の知識を身に着けていくことで、自分の見えている世界がどんどん広がっていくように感じました。

あっという間に過ぎ去った6年間で特に大した思い出もありませんが、医学部に入学してよかったと思います。

1.地域医療支援機構

◆ 論文、執筆

山本達郎、田代雅文　編：慢性痛の心理療法ABC，文光堂，2016/3/18
谷口純一，『総合診療科でみる慢性痛』，P.236-P.242

◆ 学会発表

- **谷口純一**，【益城町における医療班活動ならびにPCATとの連携と課題】，日本プライマリ・ケア連合学会，PCAT報告会，2016/5/11-5/12，演題発表
- **谷口純一**，【継続性のある総合診療/地域医療に関する臨床研究の教育の構築（第１報）】，日本プライマリ・ケア連合学会，2016/5/11-5/12，演題発表（共同演者）
- **後藤理英子**，近藤龍也，北野さやか，小野薫，河島淳司，松村剛，本島寛之，下田誠也，荒木 栄一，【ミネラロコルチコイド受容体を介した膵α細胞における GLP1分泌調節機序の解明】，第59回日本糖尿病学会年次学術集会，2016/5/19-2016/5/21，京都，ポスター
- **Goto R**，Kondo T，Araki E: Appropriate treatments in primary aldosteronism improve glucose homeostasis and protect islet function. The 9th International Aldosterone Forum in Japan，2016/5/28，THE GRAND HALL，Tokyo，Japan，Poster
- **後藤理英子**，池田学，河野文夫，中本弘作，小山耕太，田宮貞宏，天野冨紀子，**谷口純一**，松井邦彦，【熊本県医療人キャリアサポート「クローバーの会」による医学生への教育活動】，第48回日本医学教育学会大会，2016/7/29-30，大阪，口演
- **谷口純一**，【早期臨床体験実習および学外での地域医療実習に関しての実習環境整備の試行】，第48回日本医学教育学会大会，2016/7/29-30，大阪，演題発表
- **Goto R**，Kondo T，Kitano S，Ono K，Kawashima J，Matsumura T，Motoshima H，Araki E: Aldosterone excess state causes a chronic inflammation in pancreatic islet and eplerenone protects islet via GLP-1 secretion. ISH 2016 satellite symposium，Renin-angiotensin-aldosterone system (RAAS)，2016/9/23-2016/9/24，Congress Square Nihonbashi，Tokyo，Japan，Poster
- **後藤理英子**，小山耕太，田宮貞宏，**谷口純一**，松井邦彦，【熊本県における医師の地域偏在の解消・離職抑制・復職支援として必要な支援の検討】，第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会，2016/6/11-6/12，ポスター
- **後藤理英子**，近藤龍也，北野さやか，小野薫，河島淳司，松村剛，本島寛之，荒木栄一，【原発性アルドステロン症におけるグルカゴンおよび活性型GLP-1濃度の検討】，第54回日本糖尿病学会九州地方会，2016/10/14-10/15，鹿児島，口演

◆ 講演会（講師）

- **後藤理英子**，第7回 熊本眼科女性医師の会講演会，2016/8/27，熊本市医師会館
- **後藤理英子**，日本医師会女性医師支援センター事業九州ブロック別会議，2016/12/17，沖縄県医師会館
- **古賀義規**，「在宅医療」御所浦地域住民向け講演会，2017/2/15
- **後藤理英子**，【熊本地震による学びとこれから】，平成28年度山口県医師会男女共同参画部会総会，2017/3/4，山口県医師会
- **後藤理英子**，クローバーの会～2020.30実現をめざす地区懇談会～，2017/3/11，テルウェル熊本

2.地域医療・総合診療実践学寄附講座

◆ 論文、執筆

- Sakamoto T, Ogawa H, Nakao K, Hokimoto S, Tsujita K, Koide S, Yamamoto N,Shimomura H, Matsumura T, Oshima S, Kikuta K, Oka H, Kimura K, **Matsui K**; 4C(Candesartan for Prevention of Cardiovascular Events after CYPHER or TAXUS Coronary Stenting) study investigators.. Impact of candesartan on cardiovascular events after drug-eluting stent implantation in patients with coronary artery disease: The 4C trial. J Cardiol. 2016 Apr;67(4):371-7.
- Ishii M, Kaikita K, Sato K, Yamanaga K, Miyazaki T, Akasaka T, Tabata N,Arima Y, Sueta D, Sakamoto K, Yamamoto E, Tsujita K, Yamamuro M, Kojima S,Soejima H, Hokimoto S, **Matsui K**, Ogawa H. Impact of Statin Therapy on Clinical Outcome in Patients With Coronary Spasm. J Am Heart Assoc. 2016 May 20;5(5). pii: e003426.
- Ogawa H, Soejima H, **Matsui K**, Kim-Mitsuyama S, Yasuda O, Node K, Yamamuro M, Yamamoto E, Kataoka K, Jinnouchi H, Sekigami T; ATTEMPT-CVD investigators.. A trial of telmisartan prevention of cardiovascular diseases (ATTEMPT-CVD): Biomarker study. Eur J Prev Cardiol. 2016 Jun;23(9):913-21.
- Komura N, Tsujita K, Yamanaga K, Sakamoto K, Kaikita K, Hokimoto S, Iwashita S, Miyazaki T, Akasaka T, Arima Y, Yamamoto E, Izumiya Y, Yamamuro M, Kojima S,Tayama S, Sugiyama S, **Matsui K**, Nakamura S, Hibi K, Kimura K, Umemura S, Ogawa H. Impaired Peripheral Endothelial Function Assessed by Digital Reactive Hyperemia Peripheral Arterial Tonometry and Risk of In-Stent Restenosis. J Am Heart Assoc. 2016 Jun 17;5(6). pii: e003202.
- Tsujita K, Yamanaga K, Komura N, Sakamoto K, Sugiyama S, Sumida H, Shimomura H, Yamashita T, Oka H, Nakao K, Nakamura S, Ishihara M, **Matsui K**, Sakaino N,Nakamura N, Yamamoto N, Koide S, Matsumura T, Fujimoto K, Tsunoda R, Morikami Y, Matsuyama K, Oshima S, Kaikita K, Hokimoto S, Ogawa H; PRECISE-IVUS Investigators.. Lipid profile associated with coronary plaque regression in patients with acute coronary syndrome: Subanalysis of PRECISE-IVUS trial. Atherosclerosis. 2016 Aug;251:367-72.
- Tsujita K, Yamanaga K, Komura N, Sakamoto K, Sugiyama S, Sumida H, Shimomura H, Yamashita T, Oka H, Nakao K, Nakamura S, Ishihara M, **Matsui K**, Sakaino N,Nakamura N, Yamamoto N, Koide S, Matsumura T, Fujimoto K, Tsunoda R, Morikami Y, Matsuyama K, Oshima S, Kaikita K, Hokimoto S, Ogawa H; PRECISE-IVUS Investigators.. Synergistic effect of ezetimibe addition on coronary atheroma regression in patients with prior statin therapy: Subanalysis of PRECISE-IVUS trial. Eur J Prev Cardiol. 2016 Sep;23(14):1524-8.
- Ishii M, Kaikita K, Sato K, Yamanaga K, Miyazaki T, Akasaka T, Tabata N, Arima Y, Sueta D, Sakamoto K, Yamamoto E, Tsujita K, Yamamuro M, Kojima S, Soejima H, Hokimoto S, **Matsui K**, Ogawa H. Impact of aspirin on the prognosis in patients with coronary spasm without significant atherosclerotic stenosis. Int J Cardiol. 2016 Oct 1;220:328-32.
- Hokimoto S, Tabata N, Yamanaga K, Sueta D, Akasaka T, Tsujita K, Sakamoto K, Yamamoto E, Yamamuro M, Izumiya Y, Kaikita K, Kojima S, **Matsui K**, Ogawa H.Prevalence of coronary macro- and micro-vascular dysfunctions after drug-eluting stent implantation without in-stent restenosis. Int J Cardiol. 2016 Nov 1;222:185-94.
- Akasaka T, Sueta D, Arima Y, Tabata N, Takashio S, Izumiya Y, Yamamoto E,Yamamuro M, Tsujita K, Kojima S, Kaikita K, Kajiwara A, Morita K, Oniki K, Saruwatari J,Nakagawa K, Ogata Y, **Matsui K**, Hokimoto S. Association of CYP2C19 variants and epoxyeicosatrienoic acids on patients with microvascular angina. Am J Physiol Heart Circ Physiol. 016 Dec 1;311(6):H1409-H1415.

- Kojima S, **Matsui K**, Ogawa H, Jinnouchi H, Hiramitsu S, Hayashi T, Yokota N, Kawai N, Tokutake E, Uchiyama K, Sugawara M, Kakuda H, Wakasa Y, Mori H, Hisatome I, Waki M, Ohya Y, Kimura K, Saito Y; Febuxostat for Cerebral and Cardiorenovascular Events Prevention Study (FREED) investigators.. Rationale, design, and baseline characteristics of a study to evaluate the effect of febuxostat in preventing cerebral, cardiovascular, and renal events in patients with hyperuricemia. J Cardiol. 2017 Jan;69(1):169-175.
- Akasaka T, Hokimoto S, Sueta D, Tabata N, Oshima S, Nakao K, Fujimoto K,Miyao Y, Shimomura H, Tsunoda R, Hirose T, Kajiwara I, Matsumura T, Nakamura N,Yamamoto N, Koide S, Nakamura S, Morikami Y, Sakaino N, Kaikita K, Nakamura S, **Matsui K**, Ogawa H; Kumamoto Intervention Conference Study (KICS) Investigators.. Clinical outcomes of percutaneous coronary intervention for acute coronary syndrome between hospitals with and without onsite cardiac surgery backup. J Cardiol. 2017 Jan;69(1):103-109.
- Hasegawa Y, Nakagawa T, **Matsui K**, Kim-Mitsuyama S. Renal Denervation in the Acute Phase of Ischemic Stroke Provides Brain Protection in Hypertensive Rats.Stroke. 2017 Feb 28. pii: STROKEAHA.116.015782.
- Nakagawa T, Hasegawa Y, Uekawa K, Senju S, Nakagata N, **Matsui K**, Kim-Mitsuyama S. Transient Mild Cerebral Ischemia Significantly Deteriorated Cognitive Impairment in a Mouse Model of Alzheimer's Disease via Angiotensin AT1 Receptor. Am J Hypertens. 2017 Feb;30(2):141-150.
- Kawada-Watanabe E, Ogawa H, Koyanagi R, Arashi H, Yamaguchi J, **Matsui K**,Hagiwara N. Rationale, design features, and baseline characteristics: The Heart Institute of Japan-PRoper level of lipid lOwering with Pitavastatin and Ezetimibe in acute coRonary syndrome (HIJ-PROPER). J Cardiol. 2017 Mar;69(3):536-541.
- Takenoshita S, Nomura K, Ohde S, Deshpande GA, Sakamoto H, Yoshida H, Urayama K, Bito S, Ishida Y, Shimbo T, **Matsui K**, Fukui T, Takahashi O. Having a Mentor ora Doctoral Degree Is Helpful for Mid-Career Physicians to Publish Papers in Peer-Reviewed Journals. Tohoku J Exp Med. 2016;239(4):325-31.
- 若林秀隆編集， その患者さん，リハが必要ですよ！！～病棟で，外来で，今すぐ役立つ！評価・オーダー・運動療法，実践リハビリテーションのコツ. 羊土社. 2016
  髙柳宏史，『ICFによる評価方法』， Page 80-85
  髙柳宏史，『 ADLの評価方法』， Page 86-90
- **香田将英**, 宮崎景. 予防医療のエビデンス2. 前立腺癌スクリーニング. 一般社団法人 日本プライマリ・ケア連合学会「プライマリ・ケア」. 2016; 1(2): 38-9.
- あなたの「声」届けませんか？医療を創るみんなの気持ち. 宮崎大学第12回宮崎大学清花祭医学展気持ち企画. 2016.
  髙柳宏史，『熊本地震を体験して①』，Page 83-94.
  香田将英，『熊本地震を体験して②』，Page 95-104.

◆ 学会発表

- 谷口 純一， **松井邦彦**， 田宮貞宏， 小山耕太， **香田将英**， **楯直晃**， **中村孝典**， **田中顕道**， 後藤 理英子，【継続性のある総合診療/地域医療に関する臨床研究の教育の構築（第１報）】，第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会，2016/6/11-6/12
- **楯直晃**， 小山耕太， 田宮貞宏，【1ヶ月間持続する原因不明の発熱で発症し， 尿沈渣所見から診断し得た顕微鏡的多発血管炎の一例】，第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会， 2016/6/11-12， 東京， ポスター
- **髙柳宏史**，泉田信行，野口晴子，葛西龍樹，【喜多方市地域・家庭医療センターの診療内容と医療費についての検討】，第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会，2016/6/11-6/12，ポスター
- **髙柳宏史**，【日本版TransHisプロジェクト実施概要】，第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会　シンポジウム日本版TransHisプロジェクト　平成27年度結果報告会，2016/6/11-6/12
- 後藤理英子， 小山耕太， 田宮貞宏， 谷口純一， **松井邦彦，**【熊本県における医師の地域偏在の解消・離職抑制・復職支援として必要な支援の検討】，第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会，2016/6/11-6/12，ポスター

- 金子惇，**髙柳宏史**，吉江悟，長江弘子，酒井昌子，片山陽子，岩本大希，蒔田麻友子，藤野泰平，【モーニングセミナー１“在宅医療・看護の「見える化」にむけて～ICPCとOmaha Systemに学ぶ～”】，第18回日本在宅医学会大会　第21回日本在宅ケア学会学術集会，2016/7/17
- **前田幸佑**，【特発性縦隔気腫の一再発例】，第316回内科学会九州地方会，2017/1/21
- **松井邦彦**，【大規模災害発生時に危惧される感染症とその対策―熊本地震の経験より―】，第51回ペストコントロールフォーラム，2017/2/10
- **松井邦彦**，【WS1-5「熊本地震後の益城町職員に対する心のケアに関する活動」】，第22回日本集団災害医学会総会，2017/2/13-2/15
- 原田奈穂子，**香田将英**，大橋博樹，【日本プライマリケア連合学会災害支援プロジェクトPCAT2016熊本の活動】，第22回 日本集団災害医学会総会・学術集会．要望演題15「熊本地震の亜急性期，復興期対応3」，2017/2/15

◆ 講演会（講師）

- **香田将英**，【なぜあなたは医学部にやってきたのか】，熊本大学医学部医学科　平成28年度新入生オリエンテーション合宿，2016/4/9
- **楯直晃**，第6回九州地域医療研究会，2016/4/2，九州大学医学部
- **髙柳宏史**，**香田将英**，**田中顕道**，【災害における総合診療の役割とは～熊本地震の対応をもとに】，第三回九州山口家庭医療・総合診療セミナー，2016/6/2
- **前田幸佑**，【医療の原点は地域医療にあり ～つながりを大切に～】，熊本マリスト学園創立記念講演会，2016/6/6
- 宮崎景，**香田将英**，森英毅，向原圭，北村和也，斎藤さやか，日下伸明，【WS2. 根拠に基づく予防医療：個々の患者および地域に対するアプローチ】，第7回 日本プライマリ・ケア連合学会学術大会，2016/6/11-6/12
- **髙柳宏史**，**香田将英**，**田中顕道**，【災害における総合診療の役割とは　～熊本地震の対応をもとに～】，第3回九州山口総合診療・家庭医療セミナー，2016/7/2
- **前田幸佑**，【Do you know 地域？？】，第55回熊本大学医学部附属病院群生涯教育・研修医セミナー「地域医療と総合診療」，2016/7/6
- **香田将英**，【『地域と総合診療』～症例を基に考える～】，第55回熊本大学医学部附属病院群生涯教育・研修医セミナー「地域医療と総合診療」，2016/7/6
- **髙柳宏史**，【総合診療のいろは】，第55回熊本大学医学部附属病院群生涯教育・研修医セミナー「地域医療と総合診療」2016/7/6
- **田中顕道**，【今日から使えるこどもの救急ワンポイントレッスン】，玉東町社会福祉協議会　子育て支援講座，2016/7/7
- 葛西龍樹，Seo Eun Hwan，吉村学，吉田伸，**髙柳宏史**，増山由紀子，櫻井広子，森冬人，加藤大祐，【いっちゃえ！海外交流　～勢いプラスアルファのコツ教えます】，第28回学生・研修医のための家庭医療学夏期セミナー，2016/8/8
- **髙柳宏史**，【災害における総合医の役割　～2つの震災の経験をもとに～】，第11回夏の合宿企画　Summer camp 2016 in HIRADO，2016/8/26
- **香田将英**，【熊本地震から学ぶ，必要な時，必要な行動】，コーチレジ サマーキャンプ，2016/8/27
- **中村孝典**，【バイタル教室】，玉名在宅ネットワークセミナー，玉東町役場，2016/9/6
- **香田将英**，【熊本地震での活動】，プライマリケア行動医療学研究会（PCBM）サマーミーティング，2016/9/18
- **髙柳宏史**，原田奈穂子，小山耕太，【そう，私達が診ている地域では自然災害が起こるのです。】，日本プライマリ・ケア連合学会　第12回若手医師のための家庭医療学冬期セミナー，2017/2/12
- **髙柳宏史**，**前田幸佑**，【『地域医療を志す医学生および地域医療に従事する医師を支援する制度』のご案内】，平成28年度　地域医療振興協会熊本県支部会議/自治医科大学熊本県人会総会，2016/10/15
- **髙柳宏史**，【学術ワールドカフェ～研究仲間と気づきを得る一歩～】，日本プライマリ・ケア連合学会　専門医部会フォーラム2016，2016/10/23

- 大野毎子，山田隆司，**髙柳宏史**，藤田伸輔，金子惇，大倉佳宏，山岡雅顕，神廣憲記，【ICPC-2ワークショップ　－入門から研究まで－】，日本プライマリ・ケア連合学会　第13回秋季生涯教育セミナー2016/11/6
- 宮崎景， 向原圭， **香田将英**， 日下伸明， 園田健人， 森英毅，【WS4. 根拠に基づく予防医療：個々の患者に対するアプローチ】，地域に対するアプローチ日本プライマリ・ケア連合学会 第13回秋季生涯教育セミナー2016/11/6
- **田中顕道**，【訴えの中に潜むレッドフラッグサイン】，玉名郡市薬剤師会学術講演会，2016/11/18
- **松井邦彦**，【講演４「益城地区の災害医療現場と医療支援」】，第7回熊本県医療人育成総合会議熊本地震-大災害における医療と医育-，2016/12/10
- **髙柳宏史**，【地域ヘルスプロモーション】，第2回　Generalist party for the young in 九州，2017/1/28
- **香田将英**，【災害を経験したこどもとともに】，益城町要保護児童対策及びDV対策地域協議会実務者会議，2017/2/23
- **香田将英**，【熊本地震の過去，現在，未来】，日本国際保健医療学会第35回西日本地方会　ユースフォーラム，2017/3/4
- **髙柳宏史**，【家庭医・総合診療医における地域医療】，日本医療マネジメント学会　第19回熊本支部学術集会　シンポジウム，2017/3/18，パネリスト

3.玉名教育拠点

◆ 論文、執筆

- Miyamura N, Nishida S, Itasaka M, Matsuda H, Ohtou T，Yamaguchi Y, Inaba D, **Tamiya S**，Nakano T : A case of hepatitis C-associated osteosclerosis: accelerated bone turnover controlled by pulse steroid therapy.Endocrinol Diabetes Metab Case Rep. 2016;2016. pii: 16-0097.PMID: 27933174

◆ 学会発表

- **小山耕太**，【熊本県の地域医療における問題点の解析】，プライマリ・ケア連合学会学術大会，2016/6/11-6/12
- 永田恵里香，神田尚代，細瀧喜代志，畑加奈子，**田宮貞宏**，在宅緩和療法を阻害する因子の同定～退院支援の狙いどころ～，第21回日本緩和医療学会学術大会，2016/６/17−6/18，京都
- 奥園翔太，細瀧喜代志，神田尚代，畑加奈子，永田恵里香，廣川玲奈，鶴崎久美，溝上美佐，**田宮貞宏**，当院におけるがんリハビリテーション実施による変化，第21回日本緩和医療学会学術大会，2016/６/17−6/18，京都

◆ 講演会（講師）

- **小山耕太**，【総合診療科新設に伴う地域への影響】，公立玉名中央病院　院内学会，2016/10/22
- **田宮貞宏**，【総合診療科総合診療科とは】，第４回有明地区合同研修医カンファレンス，2016/10/29

⑧ おわりに

1.スタッフから一言

■ 松井　邦彦　特任教授

本当にこの一年は、あっという間に過ぎ去ってしまいました。新年度を迎えてすぐの地震の後、季節を感じることもなく、気づいたら夏が終わっていた、というような不思議な経験でした。出来上がった報告書を見ると、この一年の様々な出来事が思い出されます。

最後に、いつも私たち教員を支えて下さっている機構、センター、および寄附講座スタッフの皆様に感謝申し上げます。またご支援を頂いている、熊本県医療政策課医師確保班の皆様にも、感謝申し上げます。盛りだくさんの活動を行うことが出来たのは、皆様のおかげです。皆様にとって来年度が、よい一年でありますように。

■ 谷口　純一　特任准教授

今年度は、個人的には、大学に設置された地域医療支援センターの教員として、同センター業務と、それ以外の従来取り組んできた内外の業務とを、バランスを取りながら、整合性をつけつつ、業務遂行を行なったつもりです。また、新しく増えたスタッフに、彼らにとっても有意義な経験や業務を体験してもらうことにも務め、組織の方向性に関しても試行を進めたつもりでもあります。

具体的には、自分の活動として、地域医療支援機構としては、特に、

１）県内各自治体独自の修学資金貸与制度の調査
２）県内臨床研修プログラムマッチ者調査の準備
３）県内地域医療機関関係者との面談と調査（特に天草）
４）修学資金貸与制度の制度運営の実施と整備
５）地域医療機関の診療支援
６）その他、機構関連諸業務（運営会議、連絡調整会議、理事会、等）

また、機構業務以外の従来業務の方は、

１）大学病院総合診療科外来診療
２）医学部医学科の卒前教育での複数の授業・実習
３）大学卒前医学教育の横断的な補佐業務
４）卒後初期研修・専門医研修（総合診療）の指導・プログラム管理
５）学外の様々な依頼業務（共用試験実施評価機構委員、臨床研修指導医養成ワークショップ等）
６）学会や行政の各種委員会等（特に、熊本総合診療研究会の立ち上げ）

に取り組んだつもりです。

しかしながら、今年度は震災もあり、新たに対応を迫られたり、考えさせられることも多々ありました。震災に関しては、どこまでお役に立てたかは、心もとないし、内心忸怩たる思いもあります。

上記業務は、ある程度成果を上げたと思われるものもあれば、これから更に充実・整理させていく必要性を感じる部分もあります。次年度に向け、自部署関連の協力・強化と、外部のご理解・ご支援を更に活かせる様に取り組んでいく所存です。

■ 田宮　貞宏　特任准教授

公立玉名中央病院に教育拠点が設置され、早いもので２回目の年間報告になります。教育拠点としての実践的な教育の場の提供、総合診療科としての診療支援は、決して順風満帆ではありませんでしたが、同僚の尽力の甲斐あって、2年前には思いもよらなかった「贅沢な悩み」すら抱えるほどに進展していると思います。

教育拠点開設前から公立玉名中央病院に勤務していた私には、教育拠点のみではなく、同病院の変化もしっかりと感じられています。拠点設置以前は表に出得なかった当院の、特に人的なポテンシャルが力を発揮し始めているのです。

研修医、専修医の熱意にあふれた真摯な振る舞いは病院に確実に活気を与え、彼らは他診療科のみでなく事務職を含む多種職のスタッフの力を引き出し、もはや質の高い連携・協働の核になっています。この流れは指導医としてご協力していただいている開業医の先生を通して院外へも広がりを見せています。

地域が地域医療・総合診療の実践教育の場を提供し、地域が熱意あふれる「指導医」になる。玉名には、そんな地域になるポテンシャルがある。いや、玉名だけではない、どの地域にもポテンシャルはあるはず。そんな思いが強くなった２年間でした。

今後は先に述べた「贅沢な悩み」である、総合診療科への診療要請の増加、教育拠点での研修希望者の増加に対する受け入れ側のマンパワー不足等に適切に対処し、今の流れを是が非でも継続、充実させること、さらに地域をフィールドとした研究活動を充実させ、地域発の情報を発信し続けていくことが重要だと思われます。

公立玉名中央病院は新病院建設計画が進行中です。まずは数年後に県北に住民、地域医療・総合診療を志す医学生や若手医師、近隣医療機関に信頼される病院が誕生することを夢見て活動していきたいと思います。

■ 小山　耕太　特任助教

2015年4月に公立玉名中央病院に新設された「地域医療実践教育玉名拠点」に特任助教として着任し、2年が経過する2016年度、総合診療科での診療を通して学生・研修医・総合診療専門医プログラム専攻医の教育に従事し、2017年度を迎えるに際し、診療のみならず様々な業務に御協力・御指導頂いた全ての方々に深く御礼申し上げます。

最初に「診療」と「教育」についてですが、この1年、年間1000人を超える新規受診患者の診療を通し、延べ19名の熊本大学医学部学生（クリクラ）、7名の初期臨床研修医、3名の専攻医を指導致しました。結果、それまで定員割れのマッチ率であった玉名中央病院基幹型初期臨床研修プログラムの応募者数は、平成28年度にフルマッチに至りました。一説には、先の熊本地震による影響との意見も聞かれますが、直接現場で教育・診療に従事する私としては、全くそう感じていません。仮にそうだとすれば、応募者数が定員を上回る8名であった事と、彼らのほとんどが当院でのクリクラ修了生であった(熊本県外の医学部生は一人もいない)理由が説明できないからです。もちろん、この事象は2017年度が終了した時点で明らかになると考えており、これからの研修医指導に対する研修医からのプログラム評価が鍵だと思います。

最後に「研究」についてですが、2016年4月(設置後1年)に地域における当科及び拠点を中心とした診療・教育体制の有用性を検討する為、ICPCコーディングを用いて総合診療科受診患者を愁訴別に分類し、地域への医療貢献について、荒尾市・玉名郡市医師会に所属する医療機関93施設に対し郵送による半構造化アンケートを実施しました。結果、地域における特に診断困難症例の紹介について、総合診療科新設以前と比較し、アクセシビリティーの改善に大きく貢献している事が示唆され、この事は2017年の日本プライマリ・ケア連合学会総会で報告する予定です。

■ 後藤　理英子　特任助教

2016年度は何といっても熊本地震の発生が大きな出来事でした。保育園から大学まですべての学校が休校となる中、クローバーの会の先生方が熊本市医師会内保育所「メディッコクラブ」を年齢制限なく無料開放する活動を始められました。私自身は昨年度に構築したメールマガジンや、LINEなどを利用して情報をつないだだけですが、保育士さんや大学生がボランティアで活動してくれて、12日間で延べ155人もの児童が利用しました。

また、たくさんの方から温かい励ましのお言葉をいただき、さらに日本医師会の有志の会「さわぐるみの会」の先生方から地震支援へのご寄付もいただきました。地震で一時約1000床の病床が機能停止に陥り、在宅医療のニーズが急激に増加する中、ご寄付のおかげで「お留守番医師制度」を立ち上げることができました。

2016年度は、熊本県女性医師キャリア支援センターにとって、「もう一度臨床へ支援事業」が始まり、新たな一歩を踏み出した年でもあります。11月22日から復職コーディネーターとして高塚貴子さんが就任し、1月末までにすでに14件のご相談を受けています。

「もう一度臨床へ支援事業」では、短時間勤務制度の利用促進、週1回からの外来勤務紹介（お留守番医師制度）、メンター制度、そのほか各種情報提供などの相談も承っております。熊本の医療人の男女共同参画と医療全体がよりよい方向へ進んでいくことを願って、初心を忘れず活動したいと思います。

地震後学生さんの電話で安否確認をしていたら、「先生たちこそ大丈夫ですか、何かお手伝いできることがあったら、言ってください。」と言ってくれたり、ボランティア活動に率先して参加してくれたり、夏期実習で仮設住宅の聞き取り調査や中学生の支援を行って成長した姿を見せてくれたりと、大変な一年ではありましたが、人との繋がりや温かさ、喜びを感じることも多い一年でもありました。
貴重な体験をもとに今後も少しずつ成長していければと思います。皆様今後ともどうぞご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 髙柳　宏史　特任助教

平成28年4月、まさに18年ぶりに故郷である熊本に戻ってきました。皆さんもご存じの平成28年4月の熊本地震は、戻ってきてすぐの出来事でした。震源地を中心として、多くの熊本県民だけでなく、私自身や、実家の家族なども被災しました。まだ私や私の家族も熊本での生活に慣れる前に発生した災害でしたので、いま振り返っても本当に大変な新生活の始まりだったと思います。

熊本の医療のことについて、右も左もわからない中ではありましたが、前任地である福島で経験した東日本大震災の経験を活かして発災当初より自分が避難していた避難所で医療班を立ち上げ、外部からの救援が来るまでの間、被災された住民のケアに携わることができました。そのことは、私にとって生まれ故郷に恩返しができたかのような体験で、今となっては掛け替えのない経験だと感じています。また熊本地震が発生した時に両親の近くにいて、そして支えることができたのも不幸中の幸いだと思っています。

熊本地震の活動も大変でしたが、それ以上に熊本ならではの総合診療医のキャリアモデルを創出するといったプロジェクトもやりがいのある重要な活動の一つです。今年度は熊本大学医学部附属病院、公立玉名中央病院、山都町地域包括医療センターそよう病院で診療を行いましたが、その診療を通して熊本においても総合診療が必要とされていることを感じることができました。また九州の医学生達の間に総合診療を志向するものが少なからずいることを知ることができたのも、とても勇気づけられています。

まだまだ力不足を痛感していますが、少しずつ経験を積み重ねて熊本に貢献していきたいと思います。新年度は、今まで以上に卒前・卒後の教育、研究、そして臨床を実践していきながら、熊本県だけでなく、九州、日本、そして海外も視野に入れた活動が展開できるように、同じ志を持つ仲間と苦楽を共にしながら歩んでいけたらなと思います。

■ 前田　幸佑　特任助教

2016年4月に特任助教として当講座に着任し、早1年が過ぎ去ろうとしております。附属病院内での業務としては主に総合診療科の外来や学生の授業・実習等に携わり、また、地域医療支援としては、毎週火曜日に上天草市立上天草総合病院、金曜日に水俣市立総合医療センターで外来勤務を行って参りました。

この1年間を振り返ってみますと、やはり熊本地震という未曽有の災害に遭ったことが真っ先に思い返されます。当講座に着任してすぐの震災でしたので、附属病院内のシステムに慣れないまま、益城町へ支援に行ったりと非常に慌ただしく過ごしたことを思い出します。現在、ようやく平穏を取り戻しつつありますが、今もなお懸命に復興への歩みを進めている最中でもあります。私たちも被害を受けた方々に対し、少しでもお力になれますよう診療の面において引き続き日々活動して参りたいと思います。1日も早い復興を心より願っております。

次に印象に残ったこととしては、8月に開催されました夏季地域医療特別実習に11年振りに参加させて頂いたことです。地域のフィールド調査やワールドカフェ等を行い、以前にも増してより充実した実習になっていたことには驚きました。しかも、今年度は熊本大学 政策創造研究教育センターの円山准教授が中心となって行っている、住まいに関する意識調査にテクノ仮設団地へ学生と同行させて頂いたことは私にとっても一生忘れられない経験となりました。

最後に、当講座に着任し、これまで経験したことのなかったアカデミックな分野に触れ合えたことや学生教育に携われたことは私の中で大きな財産となりました。来年度は全てのことに対しよりアクティブに、攻めの姿勢でさらに取り組んでいきたいと思っております。また、来年度からは社会人大学院生として研究も開始していく予定です。より実りの多い1年になりますよう精進して参りますので、今後とも引き続き宜しくお願い申し上げます。

■ 古賀　義規　客員研究員

地域医療支援センターの客員研究員の古賀です。普段は天草市の御所浦診療所で勤務し、週1回月曜日に大学にきております。私は平成7年に熊大卒業後、家庭医になるために自治医大の地域医療学講座に入局しました。スーパーローテート研修後に岐阜県西濃の公的診療所に家庭医として勤務を始めました。計11年勤務後、長崎県で病院総合医として3年間勤務したのち、平成24年に熊本に戻ってきました。最初の2年間は地域医療システム学寄附講座で小国と芦北の地域医療現場に曜日単位で関わらせて頂き、その後は上益城郡山都町そよう病院に内科医として1年間勤務しました。縁あって平成27年から現勤務地に異動しております。県内の有人離島で常勤医がいる診療所があるのは御所浦と湯島のみです。私のライフワークはいわゆるへき地での家庭医療です。家庭医は診療領域の広さと同時に時間軸を重視する専門医です。時間軸を重視する家庭医にも家族の介護・教育問題は起こり、これが10年単位での長期継続が困難になる理由の1つです。また家庭医の診療の現場では、家族や友人関係まで知り長く付き合うからこそ、診察室に入ってきた時の表情だけである程度の診断がつくこともあります。時にはお看取りもあります。小さかった患児が十数年経ち、地元で結婚して子供を連れてくるような嬉しい1コマもあるでしょう。そんな家庭医が1～2年で変わるのは望ましくない面もあります。一方で長期にわたって勤務を続けるには工夫が必要です。客員研究員としての週1回の大学勤務は、自分の置かれている状況や県内の医療状況を客観的に見るのに有用です。長期的視野で御所浦診療所において何をすべきかを考えるのに役立っています。医学生実習や研修医の積極的受け入れと、家庭医マインドを持った医師による緩やかなグループ診療が特に重要だと考えています。

■ 香田　将英　医員（大学院生）

熊本地震から早一年が経過しようとしています。いろいろな支援を行っていく中で、平時の備えの大事さを感じています。今回の地震では、医療・保健・福祉にとどまらず、大学他学部の組織や行政など、多機関・多職種との連携が求められています。いま復興期においても、職種の垣根を越えた「多職種」連携が必要であり、今回の地震で様々な「しがらみ」を改めて見直し、平時の関係を構築し、復興さらには次の災害への対応力向上となることを願ってやみません。駆け出しの若輩者ではありますが、今後とも、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。

坂田　正充
地域医療支援
コーディネーター

年度末になり、心配なことが起きていました。ある地域の病院で複数の医師が退職するのに対し、補充が難しいとのこと。

私たちはいろいろな形で地域医療の支援を考えています。そして、このような事態を防ぐことは大きな目標の一つです。

これからも地震の影響はあるでしょうが、それぞれの立場や角度から、少しづつでも前に進めていきましょう。

宮前　志穂

熊本県地域医療支援機構の事務補佐員として業務が円滑に進むように、教員のサポート、予算の管理、機構主催の講演会、セミナー等の事務業務を担当しております。

山並　美緒

2児の母で仕事と家庭の両立に奮闘する毎日ですが、熊本の地域医療を支える先生や職員の方々をサポートする仕事に大変やりがいを感じております。今後ともよろしくお願いいたします。

柚原　敬三
地域医療支援
コーディネーター

今年度、熊本には春が来ませんでした。あの日から、ただひたすら1日、1日を過ごしていたように思います。そして、気づいたら、いつの間にか夏になっていた。それ位の衝撃でした。

「熊本地震」の恐怖を、そして人々の温かさと力強さを、私は一生忘れることがないでしょう。

中川　実咲

ポスター作製やHP更新、年間報告書編集、イベントでのカメラなどを担当しています。ゼミや実習で楽しそうな学生さんたちの写真をたくさん撮ることができて良かったです。

横手 友紀子

今まで触れる機会のなかった“地域医療”という世界。地域医療支援機構業務に携わるなかで、現状やその改善に奮闘する先生方・職員、将来貢献しようと頑張る学生の存在を知りました。今後も微力ながらサポートいたします。

高塚　貴子
女性医師復職支援
コーディネーター

11月22日よりコーディネーターとして新任し「もう一度臨床へ支援事業」に取り組んでおります。

育児をしながらの復職・キャリア形成に悩んでいらっしゃる女性医師の方も多く、この支援事業を通して復職へのサポートができればと思います。

久保　清美

主に「特別臨床実習」「地域医療ゼミ」を担当しております。

学生の皆さんにとって貴重な体験実習を、受入病院の皆様の温かいご支援のもと、今後もより良くして参りたいと思っております。

2.あとがき

2014年度に地域医療支援センターが設置され、我々が赴任して今年度で3年目となりました。今年度は、思いもよらぬ震災があり、業務の遂行にも多大なる支障が出ましたが、新しい「地域医療・総合診療実践学寄付講座」として関連部署の発展的改変、新しいスタッフの参加等で、少しは充実した活動が可能な状況になってきたかと感じております。

公立玉名中央病院の学外の教育拠点は、総合診療の専攻医も新たに参加し、臨床研修機関病院としての研修医もフルマッチし、卒前教育、臨床研修と連動した教育体制が少しづつ出来上がりつつあると思います。これも、同院の中野病院長を始め、関係者の多大なるご理解・ご協力があってと感謝する次第です。総合診療専門医制度も1年後にはようやく開始となる見込みでそれに備えて準備を進め、新しい専攻医も来る予定で、より一層体制を整えて行なっていく事を計画しております。

地域医療支援センターとしては、今年度は、地域の医療機関の関係者とより密に情報交換を行なったつもりですが、次年度は、より実際的に地域医療の関係者と協議する場を作っていこうと思っています。男女共同参画も後藤特任助教を中心に新しい事業が進んでおり、更に支援体制が充実化していくと感じております。こちらもより一層のご理解を賜りたいと願っております。

最後に、水田病院長を始め、大学内の様々な先生方、事務方等には多々ご指導・ご支援頂きました。また、当地域医療支援センターの事務部門のスタッフの方々および、県庁の医療政策課の方々にも、多大なるご助力を頂きました。本年度も地域医療の貢献の為にご理解頂いた全ての関係者に、あらためて、一層の感謝を申し上げますとともに、次年度もどうか宜しくお願い申し上げます。

地域医療支援センター　谷口　純一

熊本県地域医療支援機構

〒860-8556　熊本市中央区本荘1-1-1
Tel: 096-373-5627　Fax: 096-373-5796
E-mail: chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp
HP: http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/

熊本大学医学部附属病院　地域医療・総合診療実践学寄附講座

〒860-8556　熊本市中央区本荘1-1-1
Tel: 096-373-5794　Fax: 096-373-5796
E-mail: chiiki_soushin@kumamoto-u.ac.jp
HP: http://www2.kuh.kumamoto-u.ac.jp/chiikiiryo/index.html

平成28年度　活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学医学部附属病院 地域医療支援センター

熊本大学医学部附属病院 地域医療･総合診療実践学寄附講座